

楓は可笑しさに唖わかね、「ホ、、、」と吹き出した。

乙「ソラ鬼娘だ。ホ、、、だ。オイ逃けろ〜」

甲丙「逃けろ〜いつたつて逃られるものか。モウあきらめるより仕方がないわ。肝腎の腰が命令權に服従せぬのだから」

傍の木蔭から、

「アハ、、、オホ、、、」

丙「ソレ見たか、俺の鼻は偉いものだろ。若い男女が手に手を取つて、ソツと我家を脱け出し、たゞへ野の末、山の奥、虎狼の住處でも、なご酒落やがつて戀の道行きをやつてるのだ。斯う分つた以上は矢張人間だ、驚く必要はないわ」

甲乙は胸をなで下ろし、

「誰も驚いてゐるものがあるかい。貴様一人驚いてゐやがるのだ。オイ若夫婦そんな處へ隠れて居らずに、御遠慮なく此處へ罷りつん出て、何んな面付きをして居るか、一つ御慰みに供したら何うだい」

楓「兄さん、三人の御方がアナイ云ふてゐやりますから、一寸顔を拜まして上げませうかなア。ホ、、、」

甲「ナーンだ、馬鹿にしやがるな。拜まして上げやうなんて、何んなナイスかしらんが、女位に精神をどろかすアーちゃんぢやないぞ、エー。世間體をつくりやがつて「兄さん、ホ、、、」が聞いて呆れる哩。貴様は親の目をしので喰つ付いてゐるのだろ。さア此處へつん出て何も彼も白状するんだ。早う出て來んかいグズ〜してゐると爺婆の辭が出て來ると迷惑だ。それ迄に首實檢をしておく必要がある」

楓「ホ、ホ、ホ、アタイもアンタ方の首を眞檢して置く必要がござんすのよ。幸ひお月様も御照り遊ばし、よく見わるでせう。アタイ毎晩此森に現はれて来る鬼娘ですわ。ビックリなさいますなや」

甲「エー、氣味たの悪い事を吐す奴だ。モウ拜調はまかりならぬ。勝手に森の奥へすつこんで、萬劫末代姿を現はさんやうにいたせ」

楓「アタイその爺さんと婆さんが喰ひたいのよ。それで此處に青鬼の兄さんと待つてゐるの。皆さん、御苦勞だね。馬さん、鹿さん、狸さん。ホ、ホ、ホ、」

甲「エー鬼娘迄が馬鹿にしやがる哩。コリヤ鬼娘、コレでも一人前の立派な兄さんだぞ。澤山のナイスにチャホヤされて袖が千切れて怖らないから、浮世のうるさ、を避けてバラモン教の先生になつてゐるのだ。何程惚たつて駄目だ。四十八瓏のクルツ

ア砲を發射してやろうか。貴様も地獄から來たのだらうが、地獄へ歸つてアーちやんに臆鐵をかまされたご云つては貴様の面が立つまい。さア、早く退却々々」

斯々る處へ七十八人の同勢、抜き身の鎧を振りかざし、二挺の籠をかつがせてスタ／＼とやつて來る。先頭に立つた男は三人の姿を月影に眺め、

男「ヤア此處に何だか怪しいものが居る。大方三五教の奴だろ。オイ皆の者、首途の血祭に芋刺しにして行け」

甲乙丙は驚いて兩手をひろげ、

「アーモシ／＼アクに、タクに、テクだ。一寸此處で鬼娘が出やがったから評定をしてゐるのだ。見違へて貰つちや困るぞ」

先に立つた男「ナンダ斥候隊の阿克、タク、テクぢやないか。何故こんな處にグズ／＼

してゐるのだ。敵状は何うなつたか』

甲「何うも斯うもあつたもんぢやない。今此處に鬼娘が現はれたのだ。聲ばかり聞い
てチツとも姿が見えないのだよ』

先の男はビク／＼震へ出した。

男「ナ、ナ、ナニ鬼娘が出たぞ。ソ、ソ、ソとしてそれは何うなつたのだい』

甲「俺に惚やがつたと見えて、さうしても斯うしても除かんだ。大雲山のお札でもあ
つたら貸て呉れ』

男「怪体な事を云ふじやないか。マア／＼此處へ一つ籠を下ろして調べて見よう。全隊
止まれ！』

と號令する。十七八人の同勢は鎗を杖につき足を揃へてビタリと止まつた。二人を乗

せた籠は手荒く地上に下ろされた。

森の中から邊りに響く大聲の宣傳歌が聞えて来た。

「神が表に現はれて 善と惡を立別ける

三五教の宣傳使 われは治國別の神

ランチ將軍片彦の 手下の奴共よつく聞け

河鹿峠に陣取りて 生言靈に妙を得し

天下無双の宣傳使 汝等一族悉く

生言靈に拂はんこ 今や此處迄向ふたり

もはや逃れぬ百年目 汝の運も早つきぬ

二つの籠をそこに置き 一時も早く逃げ歸れ

拒むに於ては某が

又もやまびしき言靈を

鞭の如く打出し

曲に従ふ者共を

木葉微塵に踏み碎き

滅しくれんは目の當り

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も吾々は

直日に見直す宣傳使

汝の罪は憎げれど

皇大神に神習ひ

仁慈を以て救ふ可し

あゝ惟神々々

神の言葉に従へよ』

此言靈に不意を打たれて二挺籠を路上に捨てた儘、バラ／＼と蜘蛛の子を散らすが如く生命から／＼逃げて行く。アク、タク、テクの三人は腰をぬかして逃げ後れ

路傍に四這ひとなつて慄ひ戦いてゐる。楓は森かけを立出で山駕籠の扉を開いて、アツト計りおごろき叫んだ。

(大正一一、一二、八、舊一〇、二〇、外山豊二録)

瑞 月

千早振神代ながらの神業を

學ぶ神の子神になれ／＼

第一二章 大 歡 喜 (二一八一)

治國別の言靈に萬公、松彦、龍公、五三公は目をさまし

萬公 「先生貴方は俄に言靈を發射なさいましたが、何か變つた者が現はれたのですか」

治國 「ウン」

萬公 「ヤア晴公、楓さんの姿が見えんぢやないか。大蛇に吞まれて了つたのぢやあるま

いかな。オイ五三公、龍公、何をグツ／＼してゐるんぢやい。サア探したく」

と慌まはる。五三公、龍公、松彦も目をキヨロ／＼させ乍ら四邊を見まはし、二人の姿の無きに驚いて居る。

治國 「御苦勞だが四人共、森の外へ出て、こゝへ駕籠をかついで来てくれ」

萬公 「駕籠を昇けよは、ソリヤ又妙なことを仰有いますなア」

治國 「行つて見たら判るのだ。晴公と楓さんが、待つてゐる。サア四人共早く行つたり

く」

萬公 「オイ、何は兎もあれ先生の御命令だ。行つて見やうかな」

三人は「ヨ一シ合點だ」と萬公の後につき、森の外へと走り行く。後に治國別は合掌し乍ら、獨言、

治國 「あ、有難い、神様の御引合せ、さうやら親子兄妹の對面が許された様だ。之から

一骨折らなくてはなるまいと、昨夜も思案にくれて眠られなかつたが、何とマアよい都合に神様はして下さつた。之と云ふのも昨夜言靈の宣傳歌を歌つた神力の御蔭だらう。道は神と共にあり、萬物之に依つて造らるゝ、この聖言は今更の如く思はれ

て實に有難い、あ、偉大なる哉神の御神力、言靈の効用」

と感歎し乍ら、東に向つて天津祝詞を奏上し、天の數歌を歌ひ上げ、神言まで恭しく詔上げて了つた。そこへ二挺の駕籠を昇いで、一行六人は歸つて來た。

治國「ヤアお目出度う。晴公さん、楓さん、神様の御神徳は偉いものですねア」

晴公「先生、おかげで兩親にタ、對面が出來ました」

と早くも聲を曇らしてゐる。楓は紅葉のやうな愛らしき手を合せ、治國別に向ひ、覺束なけに泣聲交りに惟神靈幸倍坐世を幾度もなく繰返して居る。

萬公「先生、イヤもう何うもかうもありませんわい。偉いもんですねア、大したもんですな、エ、ー、こんな結構なことはありませんわ。本當に嬉しいですワ、何と云つて御挨拶を申上げたならよいやら、言葉も早速に出て來ませんワ」

治國「ヤア結構だ。早くお二人をこゝへ出して上げてくれ」

萬公「承知致しました。コレ、晴公さん、楓さん、何を狼狽へて居るんだい。お前さんも手傳はんかい、コラ五三公、松彦、龍、何をグツグツしてゐるんだい。千騎一騎の此場合安閑としてゐる時ぢやないぞ。サア對面ぢやく、言靈だ、言靈の幸はふ國だ」

と駕籠のぐるりを幾度ともなく、お百度參りの様に廻轉してゐる。老夫婦は悠々として駕籠より立出で、治國別の前に兩手を合せ

珍彦「三五教の活神様、有難うムいます」

静子「お禮は此通りでムいます」

と兩手を合せ、嬉し涙を瀧の如くに流してゐる。晴公も楓も茫然として、餘りの嬉し

さに言葉もなく、両親の顔を横から見守つてゐる。

萬公「何ミマア偉いこつちやないか、エ、ー。本當に誠に欣喜雀躍、手の舞ひ足の踏む所を知らずは此事だ。餘り嬉しくてキリキリ舞を致すものミ、怖うてキリキリ舞致す者と出来るぞよ、信神なされ、信神はマサカの時の杖になるぞよ……この御聖言はマアこんな事だらう。

あ、有難いく

神の力が現はれて

常夜の暗の如くなる

此山口の森蔭で

親子四人の巡り合ひ

おれの親でもなければ共

矢張嬉しうてく

手の舞ひ足の踏む所

知らぬばかりになつて来た

三五教の神様は

本當に偉いお方ぢやなア

バラモン教の曲神は

バカの骨頂だガラクタの

力の足らぬ厄難神

折角こ、迄やつて来て

肝腎要の品物を

途上に放り出し逸早く

治國別の言靈に

恐れて逃げ出す可笑しさよ

あ、面白いく

オットドッコイ有難い

それだに依つて萬公は

何時も喧しう言うてる

三五教ぢやないことじや

誠の救ひは得られない

生言靈の神力は

本當に偉い勇ましい

イソの館に澤山の

神の司はあるけれど

一番偉い空助の

あゝに續いた龜彦は

治國別と言ふ丈で

天下無双の宣傳使

俺の肩まで廣うなつた

オイ／＼五三公龍公よ

お前のやうな仕合せな

奴が世界にあらうかい

サア是からは／＼

ハルナの都を蹂躪し

大黒主の素つ首を

言霊隊の神力で

捻切り引つ切り月の海

ドブンとばかり投込んで

天が下にはバラモンの

曲津の神の影もなく

伊吹拂ひに吹き拂ひ

天地を淨め神界の

お褒めをドツサリ被りて

至喜と至樂の天國を

地上に建設せうぢやないか

治國別の先生よ

本當に貴方は偉い方

始めて感じ入りました

さうぞ私を末永う

お弟子に使うて下さんせ

コレ／＼晴さん楓さん

お前も一つ喜んで

歌でも歌うたらさうだらう

地異天變もこれ丈に

突發したら面白

オットドッコイ有難い

三五教の神様に

早く御禮を申しやいのう

何をグツ／＼してムる

側から見てもジレツたい

あゝ惟神々々

神の御前に萬公が

今日の恵を謹んで

感謝し仕へ奉る

朝日は照る共曇る共

月は盈つ共虧くる共

假令大地は沈む共

星は天よりおつる共

三五教はやめられぬ

ホンに結構な御教だ

不言實行といふことは

三五教の神様が

手本を出して下さつた

これから心を改めて

口を謹み行ひに

誠の限りを現はして

神の御子たる本職を

盡そぢやないか皆の者

あ、有難い

有難涙がこほれます

ヤットコドツコイ／＼シヨ

ドツコイ／＼コレワイシヨ

ヨイトサア／＼

ヨイ／＼のヨイトサア ドツコイ／＼シヨ

と夢中になつて、廣場を飛廻る。

治國「珍彦さん、大變な苦しい目に會はれたでせうな。お察し申します。静子さんも嘸

御心配をなされたでせう」

珍彦は涙を拭ひ乍ら

珍彦「ハイ有難うムいます。アーメニヤの大騒動に依つて親子思ひ／＼に離散し、漸く

にして娘の所在を尋ね、三人手に手を取つて、兄俊彦の行衛を尋ねんものと、いろ

／＼艱難辛苦を嘗め、テームス山の麓を流る、ライオン川の畔迄参りました所、老

の疲れが来たものか、不思議にも夫婦の者が身体の自由を失ひ、一人の娘に二人の

親は介抱をされ、あるにあらぬ困難を致して居りました所へ、黄金姫様が美しい

娘さんと共に通り合はされ、いろ／＼結構なお話を聞かして下さいます、お蔭

で夫婦の者は気分も爽快になり跡の惱みもだんくく癒つて参りました。小さい草小屋を造り、川端の一軒家で親子三人が暮して居りました所へ、ランチ將軍の手下がやつて来て、夫婦の者の祝詞の聲を聞き……貴様は三五教の間者だろ……と云つて、無理にも高手小手に縛められ駒に乗せられ、ランチ將軍の陣營迄送られました。吾々夫婦はさうなつても構ひません。惜くない命なれど、娘や兄の事が案じられ、寢ても起きてても、夫婦の者が霜寒き陣營に捉へられて、無念の涙を絞つて居りました』

と言ひさして、ワツとばかりに男泣に泣く。

治國別は慥然として慰めるやうに

治國「それは御老体の身を以て、エライ御艱難をなさいましたな。併し乍ら最早御安心

をなさいませ。吾々のついてゐる限りは最早大丈夫ですから』

珍彦は「ハイ」と云つたきり、又もや泣きじやくる。

静子

「お話申すも涙の種乍ら、ランチ將軍の陣營へ夫婦は連れ行かれ、鬼のやうな番卒に朝から晩迄、身に覺わもないことを詰問され、身体所構はず鞭たれ、實に苦しいました。そしてランチ將軍の前に時々引出され……其方は三五教の奎助であらう。汝は黒姫であらう、白狀致せ。そして其方の同居してゐた娘は初稚姫に違ひなからう。サアさこへ隠した、所在を知らせ……エライ拷問、到底命はなきものと覺悟致して居りましたが、死ぬる此身は厭はねど、さうぞして我子二人に廻り合はねば死んでも死ねないと思ひまして、嘘を言つては濟まないと存じ乍ら、向うの尋ぬるまゝに、夫は奎助でゐました、……と答へ、私はまがう方なき黒姫だ、そし

て娘は初稚姫に相違入りません……と言つてのけました。そした所がますます詮議が厳しくなり、三五教の宣傳使はハルナの都へ向つて、何人ばかり出張したかかいろ／＼と存じもよらぬことを詰問され、苦しさまぎれに口から出任せの返答を致しました所、イッの節へ送つてやらうと云つて、吾々夫婦を後手に縛り山駕籠に投込み、家來に昇がせてこゝ迄つれて來ました。吾々夫婦はさうなることか胸を痛めて居りましたが、思ひもよらぬ貴方様のお助けに預かり、其上焦れ慕うた二人の子に會はして貰ひ、こんな嬉しいことは、天にも地にもムりません。命の親の活神様」

と又もや手を合はしてワツミばかりに泣伏した。

晴公は珍彦の側に寄り

晴公「父上様、お久しうムいます。よくマア生きてゐて下さいました。私は俊彦でムいます、若い時はいろ／＼と御心配をかけましたが、三五教の教を聞くにつけて、親の御恩を思ひ出し、何卒兩親に會はして下さいませと、朝夕祈らぬ間にてはムいませなんだ」

と又もや涙を絞る。珍彦は鼻を吸り乍ら、皺手を伸ばして、晴公の頭を撫でまはし

珍彦「あ、俊彦、よう言うてくれた。其言葉を聞く以上は此儘國替をしても、此世に残ることはない。あ、有難い。持つべきものは吾子だ。コレ俊彦、安心して呉れ、私は年はよつてゐても牀は達者だから、こゝ二年や三年にさうかうはあるまいから」
晴公「ハイ有難うムいます、これから力限り孝行を勵みます。今迄の罪は許して下さいませ」

といふ言葉さへも涙交りである。楓は静子の手をシツカと握り

楓「お母アさん、随分お困りでしたらうねね。私、これ丈泣いたか知れませんかよ。ウブスナ山のイッ館へ参拜して、御両親の所在を知らして貰はうと、身をやつして、河鹿峠の山口迄参りました所、道行く人の話に聞けば、バラモン教の軍勢が谷道を扼してゐるといふことを聞きましたので、あゝ是非がない、モウ此上は両親の無事を祈り、かたきの滅亡を祈るより、私としての盡すべき途はないと思ひ、此恐ろしい魔の森の奥に大蛇の岩窟のあることを聞き、こゝに忍んで居ればバラモンの捕手も滅多に尋ねては来まいと思ひ、恐ろしい岩窟に身を忍び、三七廿一日の夜参りを、鬼に化けて致して居りました。心願が通つたと見えて、三七日の上りに兄さんに巡り會ひ、又お父さんお母アさんに會はして頂きました。さうぞ御安心下さいませ、

こんな偉い宣傳使様の懐に抱かれた以上は最早大丈夫でムいます」

と涙交りに慰める。静子は楓の背に喰ひつき、嬉し涙にかきくれる。これより治國別の命に依つて、珍彦、静子、楓、晴公の四人を玉國別のこもつてゐる祠の森へ手紙を持たせてやること、した。そして山口迄宣傳使一行は送り届けた。親子四人は玉國別に面會し、神殿造營の手傳ひをなし、夫婦は遂に宮のお給仕役となり、楓は五十子姫の侍女となつて、神殿落成の後イッ館に歸り、神の教を研究し、遂には立派なる宣傳使となつて神の御恩に報ずること、した。

(大正一一、一二、八、舊、一〇、二〇、松村眞澄録)

第一三章 山口の別 (二一八二)

治國別一行は珍彦親子四人を河鹿峠の上り口迄送り届け、茲に一行は路傍の巖に腰うちかけ、別れの挨拶に代へて歌を歌つた。

晴公「コーカス山に現はれし

大氣津姫の部下となり

八王神の列に入り

時めき給ひし我父も

コーカス山を退はれて

落ち行く先はアーメニヤ

ウラルの彦やウラル姫

開き給ひしウラル教

塩長彦の大神を

盤古神王と稱へつ

教を四方に傳へ行く

數多の司を従へて

時めき渡り居たりしが

バラモン教の大棟梁

鬼雲彦の部下共に

打亡ほされ神司

信徒共に四方八方に

雲を霞と逃げ散りぬ

其時我は幸うじて

夜陰に紛れ逃げ出し

彼方此方ごさまよひつ

我兩親や妹の

在所求むる時もあれ

三五教の神司

龜彦司に助けられ

イソの館に導かれ

尊き神の御教を

朝な夕なに教へられ

御伴となりて河鹿山

烈しき風を浴び乍ら

漸く越えて山口の

森の木蔭に来て見れば

虫が知らずか何とやら
 我師の君の宣らせたる
 考へすます折もあれ
 嬉しやく言靈の
 暗に包みし此森を
 我言靈の神力も
 笑壺に入りし時もあれ
 よくく見れば此は如何に
 肌に粟を生ずべき
 何と言葉も行きつまり

寝られぬまゝに只一人
 生言靈を思ひ出し
 かすかに見ゆる火の光
 我神力の現はれて
 隈なく照らすか有難や
 愈現はれ來りしに
 おひく近寄る火の光
 形相實にも凄じき
 鬼女の姿に驚いて
 慄ひ戦く時もあれ

我師の君の御諭しに
 分りし時の嬉しさよ
 寝られぬまゝに妹の
 小徑を傳ひスタく
 足を早めて馳來る
 記した提灯ぶら下けて
 此は一大事と兄妹は
 様子覗ひ居る内に
 アク、タク、テクの三人は
 下らぬ事を喋り出し

怪しの女は妹と
 歡喜のあまり碌々に
 手を曳き乍ら森の外
 三丁ばかり進む折
 三葉葵の紋所
 此方をさして出来る
 大木の蔭に身を寄せて
 パラモン教の斥候兵
 臆病風にさそはれて
 終には父母の所在迄

知らず／＼に喋り出す

アツと驚く間もあらず

後より来る山駕籠は

まさしく我の父母と

覺りし時の驚きは

何に譬へん物もなし

三五教の大神の

深き恵みと師の君の

生言葉の力にて

親子兄妹巡り合ひ

互に昔を語り合ひ

嬉し涙にくれにける

あゝ、惟神々々

神の恵みの浅からず

日頃慕ひし父母や

我妹に目のあたり

無事なる顔を合せつゝ

親子兄妹勇み立ち

ウブスナ山に禮詣り

我師の君に許されて

祠の森に籠もります

玉國別や五十子姫

司の前に進み行く

我身の上こそ樂しけれ

朝日は照ることも曇ることも

月は盈つことも虧くることも

星は空より落つることも

山裂け海はあすることも

皇大神の御恵みは

夢に現に忘れんや

我師の君よいざさらば

神の恵みを蒙りて

一時も早くハルナ城

大黒主を言向て

太しき功績を立て給へ

皇大神の御前に

花々しくも復り言

申させ給ふ吉日を

指折り敷へ大神の

御前に祈りて待ち奉る

あゝ惟神々々 御霊幸ませよ。

三五の神の恵みに送られて

河鹿峠もやすく越わなん。

玉國の神の司のあれませる

祠の宮に疾くも進まん。

皇神の瑞の御舎建て終せ

神の御稜威を四方に照らさん

治國別 千早振る神に習ひて親と子は

世人を守れ千代に入千代に。

河鹿山峠は如何に險しとも

神の恵にやすく渡らん。

玉國の別の命に會ひませば

治國別はよしと傳へよ。

松彦や万公、五三公も恙なく

道に盡すに傳へ給はれ

晴公 『有難し我師の君の言の葉は

胸にたゝみて忘れざらまし。

足乳根の親の命を助けまし

妹に合せし神ぞ尊き。

これよりは親子兄妹睦み合ひ

神の大道に仕へまつらん』

珍彦 『千早振る神代の春の巡り来て』

親子は千代の春に會ふかな。

三五の神の恵を今ぞ知る

治國別の口を通して。

河鹿山登りて行かん我身をば

守らせ給へ天地の神。

海山の恵を受けし師の君を

朝な夕なに神と齋かん』

静子姫 『千萬の嘆きを受けし我身にも』

今日は嬉しき旅をなすかな。

親と子を救ひ給ひし神と師の

恵は死すとも忘れざるらん。

よしやよし、此まゝ君に會はずとも

我魂は君に添ひなん。

師の君の面影見ればなつかしき

思ひに沈む初冬の空。

風の吹き荒びたる山道も

神を思へば苦しくもなし』

楓姫 『なつかしき父と母とに巡り合ひ』

兄の君にも會ひし嬉しさ。

皇神と我師の君は何時迄も

我等親子を惠ませ給へ。

ゆくりなく暗の木蔭に巡り合ひ

神の恵みに浸りけるかな。

俊彦の兄の命の歸りまさば

我師の君の氣遣はれける。

さり乍ら我師の君は生神よ

罪に穢れし人の子ならねば。

師の君の行手を祈り奉り

朝な夕なに神に仕へん」

治國別「楓姫、心安けく思召せ

我には神の守りありせば。

皇神の道傳へ行く神司

さやる魔神の如何であるべき」

万公「俊彦よ二人の親を大切に

又妹も慈みませ。

親となり子と生るゝも神の代の

つきぬ縁と聞くぞ目出度き。

人々に百の行ひありてても

孝より外によき道はなし。

朝夕に神を敬ひ足乳根の

親に仕へて世を送りませ。

年若き汝が妹を憐れみて

誠の道に育て給はれ」

晴公「あり難し萬公さんの思召

我は夢にも忘るべきかは。

友垣の情誼を今ぞ悟りけり

汝の心の赤きをぞ見て」

五三公「晴公よ親を大切に妹を

慈しみつゝ神を敬へ。

俺は今我師の君に従ひて

進みてぞ行く神の大道を。

暇あらば五三公の事を思ひ出し

神の御前に祈つて呉れよ。

さり乍ら親兄弟を後にして

俺を祈れと云ふのではなし」

晴公「五三公さんいそ／＼して居ておくれ

お前の事は忘れないから。

噯が出た時や俺を五三公が

誹つて居ると思ひ喜ぶ」

五三公「噫の二つ出るのは褒められて

居ると思ふて腹を立てなよ。

噫の二つ出るのは誹られて

居るのじゃけれぬ俺はそしらぬ。

噫の三つ出るのは笑はれて

居るのだけれぬ俺は笑はぬ。

噫の四つ出るのは風を引く

之を思ふて自愛なされよ。

五三公は蔭口言ふ様な男では

無いと云ふ事知つて居るだろ」

晴公「そらさうだ、お前に限りそんな事

云ふとは更に俺は思はぬ」

龍公「神様の御縁で心安くなり

もう別れるが情ないぞや。

晴公さん二人の親を大切に

たまには俺の事も思へよ。

その代り俺は朝夕晴公の

身の幸ひを祈り居るぞや」

晴公「龍公さん何卒宜しう頼みます

何時かはお目にかゝる時まで」

松彦「河鹿山峠險しく風荒く

猿棲み居れば氣をつけて行け。

玉國の神の司じやなけれども

お猿の奴に祟られなゆめ。

逸早く祠の森に行きついて

瑞の御舍仕へまつれよ。

道公や伊太公、純公の友垣に

宜しう云ふたゞ傳へて呉れよ」

晴公「松彦がそんな事をば云はずども

俺が宜いよに云ふておくぞや。

治國の別の命の神司

山より高き恵み感謝す。

いざさらば之より親子四人づれ

險しき阪を登り行かなん。

治國別其他三人の司達

神の恵みに安く進めよ」

楓姫「いざさらば命の親の師の君に

名殘惜くも立別れなん」

治國別「親子三人四人睦び合ひ

神の大道を登り行きませ」

斯く互に餞別の歌を歌ひ交し南と北に袂を分つた。あ、惟神靈幸倍坐せ。

(大正一一、一二、八、舊一〇、二〇、北村隆光録)

瑞月

神憑教へ許すも空蟬の

人の心を照さむがため

鎮魂教へさすも世の人の

心清むる神の心ぞ

第一四章 思ひ出の歌(二二八三)

治國別一行は、河鹿峠の山口にて親子四人に訣別し、再び足を早めて山口の森に向つた。万公は道々足拍子を取りながら進軍歌を歌つた。

万公「神が表に現はれて

善と悪とを立分ける

万公さんは幼少から

あいつは偉い男だぞ

村人達にほめられて

奇童神童と讃へられ

我兩親も喜んで

我家の寶が生れたぞ

キツト家をば起すだらう

天下無双の豪傑に

出世をするに違ない

なぞと切りにほめそやし

思ひ出の歌

蝶よ花よと育てあけ

二つの眼へ入つても

痛ない所までかはゆがり

嚙んだり吐いたり抱いたり

背中におぶつて山路を

助けて日夜に甘やかし

どう／＼こんなガラクタに

寄つてかゝつて育て上げ

里人達に姉の

やうに嫌はれ痰唾を

吐きかけられて犬のよに

杓に水を汲み取つて

追ひかけらるゝよな淺ましい

極道息子にして仕舞つた

親を恨むぢやなければ

可愛がりよが違つた故

鼻垂れ小僧の俺達に

吞ました甘茶が毒となり

挺でも棒でも動かない

やんちや男に作りあげ

女に溺れる賭博打つ

人の物こそ取らないが

酒泥棒のやんちやいれ

厄介者にして了うた

あゝ惟神々々

それでも尊き神さんは

見捨て給はず俺のよな

仕様もやうもない奴を

仁慈無限の手を延べて

可愛がつて下さつた

二人の親の愛よりも

神の恵は幾倍か

分らない程有難い

仁慈の教を聞いてから

拗ね曲つた魂も

根本的に改良し

今は嬉しき三五の

名さへ目出度き宣傳使

治國別のお伴して

悪魔の征討に上りゆく

尊き身とはなりにけり

此世を作りし神直日

心も廣き大直日

直日に見直し聞直し

救ひ玉ひし皇神の

恵を思ひ浮べては

涙の露の晴れ間なし

俺もこれから赤心を

一生懸命に研き上げ

押しも押されもせないよな

神の司と選まれて

先祖の御名は云ふも更

我兩親の御名迄も

現はしまつり養育の

その大恩に報はんこ

飯食ふ間も忘れない

年の薬と云ふものか

此頃親が戀しなり

早く安心させたいと

思ひは胸に満ち溢れ

氣が氣でならぬ我身魂

二人の親に孝行を

したい時分にや親はなし

それぢやと云つて石塔に

温い布圍も着せられず

何程甘い飲食を

供へた處で甘いとも

何ともかんとも云はぬよに

なつて了つたらごうせうぞ

三五教の神様へ

こんな事でも致します

ごうぞ二人の親達の

命をのばして萬公が

天晴手柄を致すまで

生かして置いて下さんせ

それが私の第一の

朝な夕なの願ひぞや

森の木蔭で晴公が

戀しき親に廻り會ひ

妹と遇ふた嬉しさを

眺めた時の我心

飛び立つばかり嬉しうて

じつと済まして居れなんだ

慌者だと笑はれよが

飄軽者だと誅られよが

あの場に臨んでそんな事

構ふて居るよな間があるか

あ、惟神々々

私を育てた両親も

朝な夕なに神様に

両手を合せ萬公が

一時も早く改心し

一人前の益良雄に

なつて故郷に錦をば

飾つて歸り來ますやうに

祈つて御座るに相違ない

山より高い父の恩

海より深い母の慈悲

それに増してなほ高い

深い恵は神の恩

あ、惟神々々

この萬公の赤心を

諸なひたまひて我靈を

清く守らせ玉へかし

我師の君に従ひて

旗鼓堂々神の道

今や進んで出で、往く

朝日は照ることも曇ることも

月は盈つとも虧くることも

如何にか忘れん親の恩

忘れてならうか神の恩

神は我等と共にあり

人は神の子神の宮

こんな嬉しき御教を

聞いたる上は一日も

仇に月日は送れない

あ、惟神々々

御靈の恩頼を願ぎまつる」

治國別は道々歌ふ。

思ひ出の歌

治國別

「高天原はいづくなる

榮わ久しきバラダイス

現世の衣をぬぎすて、

いと珍らしき神の國

○

高天原はいづくなる

夜なき清き神の國

星の影さへキラ／＼と

幾百倍の光あり

皆天人と讃へられ

清く正しき神の國

御靈の清き人々の

常磐堅磐に榮わゆく

主の御神のあれませる

月日は清く明けく

地上の世界に比べては

この樂園に住む人は

不老と不死の境界に

置かれて主神を信愛し

いや永久に榮わゆく

神の御國ぞ尊けれ

茲に二つの區別あり

稱へて神の在す國

稱へて清き身靈等の

成り濟ましたる人々の

靈國、天國諸共に

夜晝なしに輝きて

玻璃や珊瑚の殿堂や

無上の正覺開きつ、

あゝ惟神々々

高天原の天界は

其第一を靈國と

第二の國を天國と

地上を捨て、天人と

喜び勇み遊ぶ國

愛と信との日月は

金銀瑪瑙瑠璃神祿

樹木は野邊に繁茂して

玲瓏玉の如くなる
手を携へて神業に
宇宙唯一の神の國
御靈幸倍まし／＼て
身靈を汚す事もなく
御魂となりて天國へ
尊き恵に包まれて
住まはせ玉へ天津神
ミロクの神の御前に
朝日は照ることも曇ることも

天人男女は永久に
勤しみ仕へまつり居る
あゝ、惟神々々
地上に生れし我々の
現世の事皆終へて
上りし時は主の神の
安く樂しく永久に
國治立大神や
畏み／＼願ぎまつる
月は盈つことも虧くることも

神に任せし我々は
至粹至純神ながら
信と愛とに培ひて
神の御國に神籍を
神の御前に願ぎまつる
地上に人の種を蒔き
清き御靈を養ひつ
主神のまします天界へ
大神業に仕ふべく
人とし生れし神の子は

如何でか曲に汚されん
神に稟けたる御魂をば
此身此儘天國の
置かさせ玉へ惟神
仁慈無限の大神は
肉の宮をば胞衣として
成人したる其上は
迎はせ玉ひ天國の
依さし玉ひしものならば
善をば勵み惡を避け

神をば信じ且つ愛し

神の御子たる本分を

盡す身靈となるならば

如何でか捨てさせ給ふべき

思へばく人の身は

實に有難いものぞかし

萬公さんよ五三公よ

龍公さんよ皇神の

仁慈の心汲み取りて

神の教をよく守り

小さき慾に囚はれて

身靈を汚す事勿れ

限りも知らぬ生命を

保ちて榮ゆる天國の

御民となりて地の上の

青人草を守るべき

身靈となりば人として

もはや缺點なきものぞ

ミロクの神が現はれて

現幽神の三界を

立て分け玉ふ世となりぬ

斯かる尊き大御代に

生れあひたる我々は

至幸至福の者ぞかし

喜び祝へ神の恩

讃へまつれよ神の徳

神は我等と共にあり

人は神の子神の宮

決して汚す事勿れ

あゝ惟神々々

みたまの恩頼を願ぎまつる」

斯く歌ひて治國別一行四人は、風荒ぶ荒野を渡り、煌々たる太陽の光を面に受けな

がら、意氣揚々として、又もや山口の森に差か、つた。

萬公「先生、夜前の活劇場へ又もや到着致しました。随分夜前はよい獲物がありました

な。今晚もこゝで一つお宿をかる事に致しませう。今度はひよつとしたり、ヒウド

「ロ／＼がやつて来るかも知れませんが」

治國

「ハ、、、、夜前のやうに蕩蕩の幽霊と早替りせらるゝと困るからなア。此森は

危険だよ、サア今日の中に膝栗毛に鞭を打つて浮木の原まで遠乗りをせうかい」

萬公

「浮木の森迄は幾等程里程がありますか」

治國

「まアざつと五十里位のものだらう」

萬公

「それや大變だ。何うしてコンパスが續くものですか」

治國

「又弱音を吹き出したなア、神様のお力を借れば五十里位は一息だ、サア往かう」

と山口の森を一寸目禮し、委細構はずス々／＼と、南を指して急ぎ行く。

(大正一一、一一、八、舊、一〇、二〇、加藤明子註)

第三篇 珍聞 萬怪

第一五章 變

化（二一八四）

治國別一行は山口の森を後にして、足を速めて二十里ばかり南進した。二十里といつても極近いものである。一里といへば我國の二百間位なもの、丁度三丁強に當るのである。

治國別は道の傍の細き流れに下りて喉をうるほし、空行く雲を眺めて暫し息を休めてゐた。二十間ばかり隔つた田圃の中にコンモリとした森が、巍然と廣き原野を占領して我物顔に立つてゐる。その森の中より騒々しき女の聲が聞えて來た。萬公は早くも聞き入り、

萬公「モシ先生、あの森の中に奇妙奇天烈な活劇が演じられてゐるやうです。どうです

今晚は活劇見物がてら、あの森で一宿致しませうか。森林ホテルも乙なもんですで
 ー。夜前も森林ホテル、今晚も又同じく云ふのだから日記帳につけるのも大變使
 利がよろしからう。アレノ御聞きなさいませ。猿を攻めるやうな女の聲、此奴は
 何か秘密が伏在して居るでせう。兎も角實地探険に参りませうか」

治國「モウ少し先へ行き度いのだが、あの聲を聞いては宣傳使として見逃して通る譯に

は行かぬ。大變な茂つた森だから、ソツト忍び寄り、何事が様子を考えて見やう」

五三「オイ萬公さん、又ヒュードロクだぞ。肝をつぶすな」

萬公「ナアニ畫の幽霊が恐くて泳るかい。ドロクでも泥坊でもかまはぬぢやないか。

大方泥坊さんが旅人を引張り込んで衣類を剥ぎ、厭がる女を無理無体に捻伏せて念
 佛講でもやつて居るのだらう」

五三「念佛講で何だい。妙な事をいふぢやないか。ハ、ハ、ハ、幽霊が出るので成佛する様

に念佛を唱へてゐるのだな。それにしては根つから詠歌の聲が聞ぬぢやないか。

薩張金切聲のチャア〜だ。一寸聞く狐々様のやうにもあるし、猿のやうにもあ
 るし、女の様にも聞えて来る。何だか怪体な代物だ。研究の價値は十分にあるだら
 う。なア先生」

治國「ウン兎も角行つて見やう。併し箆口令を布いておくから、號令が下る迄、何事が

あつても發聲する事は出来ないぞ」

萬公「承知致しました。囁き話も出来ませんか」

治國「ウン勿論だ」

萬公「五三公、龍公に對し箆口令を布く。堅く沈黙を守るのだぞ」

五三「ハ、直に受賣りをやつてやがる。そんな小賣りをしたつて俺達ア買ふ氣づか

いは無いぞ。物價調節令が出て居るのに、それを無視して小商人が暴利を貪り、

無性矢鱈にゴンべつたり、ビヤクツたりするから爲政者もなか／＼骨の折れる事だ

哩アハ、、、」

治國「サア行かう、沈黙だ」

と嚴命し乍ら草野を分けて進んで行く。

見れば鬱蒼たる森の中に五六人の荒男、一人の美人を捕へ、四方八方より寄つてか
かつて打擲を始めてゐる。治國別は平然として此光景を木の茂みより眺めてゐる。萬
公は胸を躍らせ、口をバツト開け、兩手をひらいて中腰になり、今にも飛び出さん
する格好で齒がゆ相に片唾を呑んで、治國別の命令一下すれば、片端から撲り倒し、

虐れてゐる女を救ひやらん身構へしてゐる。五三公も龍公もハラ／＼し乍ら、い

どかいけに眺めてゐた。治國別、松彦は素知らぬ顔で微笑をうかべ乍ら愉快氣に見つ
めてゐる。女を仰向に寝させ胸倉をグツ取り大の男が蝶蝶のやうな拳骨をふり上げ
キア／＼云ふ女を憎々し氣に睨みつけ乍ら、

甲「コリア尼つチヨ、何うしても白狀致さぬか。しぶとい奴だなア。貴様は三五教の初
稚姫といふ奴だらう」

女「イエ／＼決して／＼そんな女ぢやムいません。山住居をいたして居るもの、娘でム
います。何卒御慈悲に御助け下さいませ」

甲は「エーしぶとい女奴」

と嘯鳴りつけ、拳骨を固めて前額部をコツンと撲る。撲られて娘はキア／＼と叫ぶ。

萬公は今や一矢の弦を離れんとする如き勢で、體を前方に反らせ足をふん張りマラソン競争の合圖の太鼓が鳴るのを待つやうな構へで、腕を唸らしてゐる。

一方の荒男は又もや聲を荒らげ、

「エーしぶこい。貴様は奎助の娘に間違ひなからう。さあ尋常に白狀して了へ。貴様の親の奎助や、三五教の黒姫はライオン河の畔でランチ將軍様の部下に捕へられ日夜の責苦に逢ふて苦しんでゐるのだ。貴様さへ白狀すれば二人の罪は許され、貴様はランチ將軍様のお妾と扱擡されて出世をするのだ。コリヤ女、此處で殺されるのがよいか、將軍様のお妾になつて親の生命を助けるのがよいか。よく思案をして返答いたせ」

女

「オホ、、、彼のマア瓢六玉わいのう。何うなと勝手になさいます。奎助なきこい

ふ父親は持つた事はムいませんわ。黒姫なんて出逢つた事もありませんわ。さア、殺すなと何なとして下さい」

男

「ヤア俄に強くなりやがつたな。ハ、あんまりピツクリして氣が違つたのだな。こんな氣違ひを連れて行つたところで、將軍さんの御用に立つても無し、併し乍ら何處迄も白狀さして伴れ返らねば、俺達の役目が濟まぬ。オイ女、貴様はランチ將軍様を怨んで晝は大蛇の窟に身を隠し、夜は鬼娘と化けて呪の五寸釘を打つてゐるやがつたのだらうがなア。そんな事はチャンと探索してあるのだから、モウ駄目だ。俺が此間の夜りだつた…頭に蠟燭を立て、鏡を下げ、凄じい様子をして山口の森へ行きやがつた時、俺も一寸氣味が悪かつたけれど、なアにバラモン教の神様に頼めば大丈夫だと思ひ、微行して貴様の言ふ事を聞けば、何卒私の親の仇が打てますやう

に、そうして無事に逃れますやう、ランチ將軍が亡びますやうと言つては釘を打つてゐたではないか。そこ迄手證を握つてゐるから、モウ隠しても駄目だぞ。大それた女の分際として大蛇の窟に安閑として高野をかいて寝てゐやがつた所をどう捉まへて來たのだ。さア、自状せい。昨日の日暮から殆ど一日一夜骨を折らしやがつて、ドシ太い。俺だつて腹が減つて泳らんぢやないか」

女「オホ、、、何といふお前達あ、間抜けだ。その女は楓といつて夜前も釘を打ちに行つたよ。妾と間違へられちや大變だ。偉い災難だ。三五教の宣傳使に助けられ今頃は河鹿峠を上つてゐる最中だ。餘程好い頓馬だここ。ホ、、、」

男「コリヤ尼つちよ、そんな事いつて俺達を胡麻化さうとしても駄目だ。チャアンと證據が握つてあるのだから、好い加減に白状致さんと親の爲に悪いぞ。李助や、黒姫

が可愛想とは思はぬか」

女「ホ、、、李さんが何うならうと、此方ちや一寸も目算が外れんのだから構やせんわ。黒さんが何うならうとお前さんが苦勞する丈の事ぢや。殺しなつと煮て喰はふと勝手になさいませ」

男「コリヤ女、貴様は親に對し孝行といふ事を知らんのだなア。丸で狐狸のやうな奴だ不人情者だなア。こんな優しい顔をしやがつて、親不孝の魂見下けはてた女だ」

女「妾はコン／＼さんだよ。お前達は馬鹿だからつまゝれてゐるんだ。そんな枯木杭をつかまへて何をしてゐるのだ。よい盲目だなア、ホ、、、」

男「丸で狐のやうな奴だ。ドシ太い何ほ叩いても／＼キア／＼吐すばかりで往生しやがらぬ。此奴は不死身かもしれぬぞ。俺一人では駄目だ。皆寄つてたかつて叩き延

ばしてくれ』

女 『ホ、、、たかゞ一人の女を取まいて大の荒男がよりか、り、一晝夜もか、つて何うする事もようせんといふやうな間抜けが假令何萬人か、つたつて烏合の衆だからカラツキシ駄目だよ。御氣の毒様、お前さんの手を御覽なさい。木の缺杭をた、いて血だらけになつてますよ』

男 『云はしておけば際限も無き雑言無禮、最早勘刃袋の緒が切れた。さア一同寄つてたかつて殺して了へ』

『よし合點だ』

と七八人の荒男は棍棒を打振り一人の女に打つてかゝる。何う間違つたか、互に入り亂れて同士討をやつてゐる。女の體よりバット立つた白煙、太い尾を下けた白狐が一

匹、ノソリノソリと歩き出し、コンコンクワイクワイと吠ね乍ら、森を見棄て、逃げて行く。

八人の男は女が狐と變じて逃げ失せたるに氣がつかず、一生懸命に同士討ちをつゞけてゐる。可笑しさを休めてゐた萬公は口が破裂した様に「グワツハ、、、」と笑ひ聲を噴出する。治國別外三人もたまりかねて「アハ、、、」と體を揺つて笑ひ出した。此聲に驚いて八人の奴は一生懸命雲を霞と逃げて行く。

萬公 「グワツハ、、、道公さんぢやないか。到頭大勢の奴を笑ひ散らしてやつた。エヘ、、、」

一同 「アハ、、、」

五三 「先生、貴方は本當に感心ですよ。何故あんな優しい女が虐待されて居るのに平氣

で笑つてゐるのか、無情冷酷な御方だと内實は思つてゐました。飛び出したいは山々だつたが命令が下らぬものだから、差控へて居りましたが、彼奴は狐になぶられてゐたのですなア」

治國

「あの御方は三五教の御守護神、鬼武彦の御眷族、月日明神さんだ。バラモン教の捕手が山口の森に隠れてゐた楓さんを召捕らうと大蛇の窟迄覗きに行き居つたのだから、月日さんが楓さんの親子對面が出来る迄、あゝして身代りになつてゐて下さつたのだ。而して吾々に御守護あつた事を示すために今迄待つてゐて下さつたのだよ。お前達の目に娘と見わたのは枯木杭だ。可愛想に娘の額だと思つてトゲだらけの鉤杭を撲りつけ、血だらけの拳になつて居つたぢやらう」

萬公

「へー何だか赤い手袋をはめてゐるやがると思ふてゐました。月日さんといふ明神さ

んは本當に偉い方ですなア」

治國

「サア今晚は此處で宿ることにしやう。先づ第一に天津祝詞の奏上だ」

一同

「ハイ畏まりました」

邊りの小溝で口を嗽ぎ、手を洗ひ、型の如く祝詞を奏上し、一夜を此處に明す事になつた。あゝ、惟神、靈幸倍坐世。

(大正一一、一二、八、舊一〇、二〇、外山豊二録)

第一六章 怯

風(二八五)

冷たき初冬の風に

吹かれて降り来る村時雨

治國別の一行は

珍彦親子を河鹿山

登り口まで送りつけ

萬公五三公龍公や

松彦引つれ大野原

時雨を冒して進み行く

歩みも早き山口の

森をば右手に眺めつ、

草野を分けてやうくに

野中の森に到着し

怪しき聲に木の茂み

身を忍びつ、窺へば

鬼をもひしぐ荒男

一人のか弱き女をば

捉へて無体の打擲を

なし居れるこそ歎てけれ

治國別は木蔭より

此慘状を一瞥し

其成行に任す内

女は忽ち白煙と

なつて消えしと思ふ間に

思ひもよらぬ白狐

のそりくく這ひ出し

野中を指して逃げて行く

七八人の荒男

互に棍棒ふりかざし

眼くらみて同士打

挑み戦ふ可笑しさに

萬公さんは吹きいだす

治國別も松彦も

五三公龍公もこらわかね

思はず知らず吹き出せば

男は驚き雲霞

森の奥へと一散に

怯 風

命からく逃けて行く

治國別の一行は

月日の白狐の出現に

驚異の眼を見はりつ、

白狐の後を伏拜み

森の廣場に簀を布き

天津祝詞を奏上し

生言靈を唱へつ、

一夜を茲に明かさん

脇を枕に横たはる

冷たき風は容赦なく

森の梢を揺がして

ザワ／＼／＼と鳴り立てる

彼方此方にキヤツ／＼と

聞ゆる聲は山猿か

但は魔神の襲來か

只事ならじと萬公は

一人胸をば躍らせて

眠もいせすバチ／＼と

目を屢叩き座りゐる。

萬公は何となく、心淋しく、思ふ様に寝つかれねば、横になつて見たり、座つて見たり、一行の寢息を伺つたりなきして、夜の明けるのを一時も早かれと待つてゐる。

萬公「先生と言ひ、松彦さんと云ひ、肝玉の太い方計り、斯う他愛もなく寝て了はれては淋しい事だわい、俺や又何うして寝られんのか知らんがなア、昨夜のやうに又もや楓の化者がやつて來よつたなら、おらモウ、假令眞人間であらうと辛棒が出來ないワ。七八分迄肝玉をきつかへやつて了つたのだから、強相に言ふてるもの、實際はピク／＼もんだ、誰か起きて下さらんかいなア。折角の安眠を揺り起してお目玉頂戴してはたまらないし、何だか首筋元がゾク／＼して來だした。誰か物云ふ奴が一人あると、互に語り合ふて此淋しさを紛らすのだけれど、厨計りでは根つから有難くないわい。五三公の奴、怪体な厨を出しやつて、何だ。がら／＼／＼／＼

といふ聲がどこにあるかい。グツ／＼／＼鼻を鳴らしてゐるのは、コリヤ龍公だろ、丸でお粥をたいた様な聲を出しやがる。エ、こんな聲を聞く益々淋しうなつて来た。一つ鼻でも摘まんで起してやろかな、怒つたら罪のない喧嘩を始める迄の事だ。何にかして紛らさなくちや、仕方がないワ。オウそうだ／＼、言葉を忘れて居つた。夜前の先生に聞いた言葉を一つ打出して見よう。そうすれば、陰鬱な空氣がどつかへ退散し、俺の氣分もさわるだろ。エーエ、副守の奴、早から泣き聲を出しやがる。おりやそんな弱い男だないが、怪体の悪い、弱つたらしい守護神がくつ、いてるとみねるわい」

五三「公は昨夜の夢を見た見ね、いやらしい聲を出して、

五三「キヤア、幽霊だア、鬼だア、オイ萬公、ウニヤ／＼／＼」

万公「ア、ア、又ビツクリさしやがつた、此奴ア一つ揺り起してやろ、寝はれてけつかるのだろ。オイ／＼五三公、起きたり／＼。大變魔されてるぢやないか」

五三「あ……、恐ろしこつちやつた。よう起してくれた。お前又無事で居つたのか。マアそれで安心だ」

万公「無事で居つたかて、……妙な事を云ふぢやないか、俺の夢でも見たのか」

五三「ウーン、見た／＼、貴様はなア、昨夜會ふた楓さんの變装以上の……厭らしい怪物が現はれて、赤黒い瘦た手を出して、貴様の素つ首をグツと握り、山奥へひつ攫へて行つた夢を見たのだ。其時にキヤア／＼とお前の泣く聲が何とも知れぬ厭らしかつた。まだ誰かキヤア／＼言つてるぢやないか」

萬公は身慄ひし乍ら、

万公 「貴様は身魂が曇つて居るから、そんなケ、怪体な、悪夢に襲はれるのだ。キヤツ
く云ふてるのは猿の聲だよ。オイちとしつかりせんかい。エ、ー、俺だつて氣味
が悪くて、たまらんぢやないか。せうもない夢を聞かされて……」

五三 「先生は此處に居られるからなア」

万公 「居られねでかい。現に此通り解がして居るぢやないか。餘り暗くつてお姿はハツキ
リせんが、大抵解で分つてるわ」

五三 「そうだらうかなア。俺の夢には、貴様が化物に引摺まれ、キヤア〜言ふて逃げ
た時、治國別の先生と松彦さんが、後追つかけて行つて了はれた夢を見たのだ」
万公 「そら夢だ。現に處此に解を聞いて居られるのだからマア安心せい。時に龍公を一
つ揺り起してくれんか、貴様と二人で面白くない話をしてゐるさ、だん〜體が縮ま

るやうになつて来る、何とマア陰氣な夜さぢやな」

五三 「それ程淋しければ、俺に喰ひついて居れ。言ふても五三公さんは肝つ玉が太いか
らなア」

万公 「そうだらう、夢見てもビックリするやうな男だからな」

二三間 傍に何かヒソ〜と人聲が聞けて来る。萬公、五三公は俄に口をつめ、抱
ついた儘、耳を傾け出した。

アク 「オイ、テク、昨夜は随分驚いたねわ、今晚もこんな所で休むのはい、が、又ホツ
ホ、なんて仰有るさ、モウ此上は居た、まらないから、小聲で大自在天様を拜まう
ぢやないか」

テク 「コリヤ、アク、貴様も悪人に似合はぬ氣の弱い奴だなア。人に相談しなくつても

自分の口で神様に願つたら何うだい

アク「俺だつて餘りビツクリしたので、神さんまでが怖うなつて、連がなくては拜めんぢやないか。さうだ、三人聲を揃へて御祈願せうぢやないか。又ホッホ、がやつて來さうだぞ。さうも陰鬱になつて來た。僅か二十里の道を猫の様に、草原計りやつて來たのだから、枯芒で手も足も顔も疵だらけだ。何だかビリ／＼と體中が痛くて仕方がないワ」

テク「そうだから、當り前の道を俺がテクラうといふのに、貴様が憶病風に誘はれて、道もない所を四道になつて歩きやがるもんだから……自業自得だ」

アク「それだぞ云つて、うっかり立つて歩かうもんなら、俺達の體が見ゆるぢやないか。もしも三五教の宣傳使にでも見つけられてみよ。それこそ大變だ。俺の提案を遵奉

したお蔭に依つて、やう／＼、此處まで安着したではないか。オイ、タク、何だ、

糞落着きに落つきやがつて、チニ何か話でもせんかい、淋しうて仕方がないワ」

タク「おりやモウ腰が痛くつて、話どころかい。氣息奄々だ。随分四足の眞似も苦しいもんだなア」

アク「貴様はコンパスが長くて、手の方が比較的短いから、四足になるのもわからろ、ソリヤ尤もだ。併し足の長いのは手の長いのよりもマシだ、手が長いと交番所の前が通れんからなア」

テク「何だか知らんが、俄に此森へ這入つてから淋しくなつたぢやないか。そこらあたりに死屍累々と横たはつてるやうな怪体な氣分がするぢやないか」

タク「ヒョツとしたら、こゝは墓場ぢやあるまいかな。屍が聞ゆるやうだ、幽霊が寝て

けつかるのだからうかな」

テク 「馬鹿言へ。幽霊が肝をかくかい。大方狸が寝てゐるのだから。確に野中の森だ、墓場の氣遣ひないワ、マア安心せい」

タク 「何だかお粥でも炊いてるやうな音がするぞ」

アク 「オイ、そんな怪体な話はやめて、トツクリと寝やうぢやないか。寝さへすれば怖い事も何にも忘れて了ふからな。疑心暗鬼を生ずるか云つて、此暗の晩にそんな事計り云うてるぞ、又それ、ホッホ、ぢや」

萬公五三公は二三間側で、三人の話を聞き終り、

万公 「オイ五三公、此奴アバラモン教の憶病者だで。昨夜晴公や楓さんに脂をとられた奴と見ゆるワイ。オイ一つ俺が晴公になるから、五三公お前楓になつたらさうだ、

お前の聲は女に似てゐるからなア」

五三 「ウン、そら面白い。そんなら俺から一つ戦闘開始しやうかな。貴様と俺とは餘程憶病者だと思つてゐたら、モウ一段と憶病者が現はれよつた。上には上のあるもんだな」

と小聲に囁いてゐる。三人はそんな事とは知らず、暗がりに手を繋ぎ合せ、慄びく小聲で囁いてゐる。

アク 「オイさうも形勢不穩だぞ。キャツく吐す猿の聲が、何とはなしに幽さんの聲のやうに聞えて来るぢやないか。こんな時には腹帯をしつかり締り居らんぞ、ヒユードロくくくぢやられぢや、おたまり小坊子がないからなア」

五三公は暗がり乍らも、兩手を後にニユツと伸ばし、手首をベロツと下げ、少し立

膝をして、蟻螂の様に體を前へつき出し、

五三 「ヒュードロ〜〜、ホッホ、」

アク 「ソーレ、来た、逃げろ〜」

テク 「逃げろ〜云つたつて、又脱けた」

タク 「あ、あ、俺もぬけた。アク、俺達二人をかたけてのいてくれ」

アク 「俺もチヨボ〜だ」

「ホッホ、アッハ、」

アク 「ヤア昨夜の化州だ、執念深い、どこ迄もついて来やがるのだな。オイ、タク、テク、かう幽霊に魅入られては仕方がない、ヤケ腰を据わやうぢやないか」

斯く話す内十九日の夜の月は東天をこがして一層鮮かな光を地上に投げた。丁度此

處は木の疎な所で、東がすいてゐるので、一同の顔はバツと明かになつた。

万公 「アハ、、、これで天地開明の気分になつて来た、ヤッパリ月の大神様のお蔭は有難いものだな。肚の底まで光つたやうな氣がする。モウ大丈夫だ。オイ龍、起きんかい」

「ウン」と云つて起きて来たのは松彦であつた。

松彦 「ヤア良い月だな。治國別様龍公の姿が見ぬぢやないか、何處へ行かれたのだろ」

万公 「ヤア、ホンに〜大變だ。知らぬ間に何者か先生を拐はかしやがつたなア」

五三 「ナアニ芋でも埋けに行かれたのだよ。何俺達を捨て、勝手に往くなんて、そんな不親切な事をなさるものか。なア松彦さん」

松彦 「ソリヤ何とも分らんなア。何程兄弟だつて、心の中迄分らんからなア」

五三「ヘーン、もしもそんな事だつたら大變ですがな」

松彦「師匠を杖につくな、人を頼りにすなと神様は仰有るぢやないか、一丈二尺の禰をかいた男がそんな弱音を吹くものぢやない、之から各自單獨で、ランチ將軍の陣營へ突撃せよと命ぜられたら何うするか。それでも行かねばなるまい。お前達は生の執着が強いから恐怖心が起るのだ。捨身になれば何も恐ろしい事はないぢやないか。最前から随分憶病風に吹かれて居たなア、何だホッホ、なんてせうもない餘興をやるぢやないか」

万公「何程恐怖心になられたといつても、流石三五教の信者ですわい。餘裕綽々として滑稽を演ずるのですからなア。あれ御覽なさい、あこに三匹の四足がへたつて居りますわ」

松彦「ウン、あれはバラモン軍の斥候を勤めてる阿克、タク、テクの三人だ、楓さんに脂を取られた連中だらう」

万公「松彦さん、貴方は解をかき乍ら聞いてゐたのか」

松彦「ウン、解は解、聞くのは聞くのだ、鼻は休んで居つても、耳は起きてゐるからなア」

阿克は手を合せ、

阿克「モシ、三五教の先生、私はお察しの通り、阿克、タク、テクの三人でゐいます決して貴方方に仇をするものだまりませんから、さうぞ宜しく頼みます……とは申しませんが、いちめんやうにして下さい、構うてさへ貫はねば、何うなつと處置をつけますから、本當に貴方の家來には意地の悪い方がありますなア。吾々三人の腰

を抜いて了つたのですから本當に困ります」

松公 「それは氣の毒だ。併し乍ら二十里の道を四這になつて来るのは、随分苦しかつたでせうなア」

アク 「何もかも皆御存じですな、其通り暫く四足の修行をやつてみましたが、随分苦し

いものでムいます」

松公 「コンバスの長い手の短いタクさんは餘程お困りだつたさうですね」

タク 「手の短いのは正直者の証據ですから、さうぞ大目に見て下さい」

松公 「アハ、、、マア此方へお出なさい、ゆつくり話を交換しませう」

アク 「オイ、タク、テク三五教の大將は餘程開けてるぢやないかエ、ー、バラモン教の司だつたら、随分威張る所だかなア。ヤツバリ平民主義と見ゆるワイ、俺や平民主

義が大好きだ……三五教の先生、そんなら一切の障壁を除いて御慰懇に預かりませう」

松彦 「お互に御心安う」

万公 「モシ／＼先生、あんな事言つて、様子を考へてゐるのですよ、マ一つホ、、、でおきかして逃がしてやりませうか」

アク 「ホツホ、、、モシ／＼萬公さん、正体が現はれた以上は、ホ、、、もアハ、、、も笑ひの種にこそなれチョツツも恐ろしくありませんよ。一つ得意のホ、、、をやつて御覽なさい」

万公 「オイ、五三公、最う駄目だ、仕方が無いなア」

五三 「松彦さんがあ、仰有るんだもの、俺たちは泣き寝入かな。無條件降服だ……否無

條件還附だ。之から臥薪嘗膽、十年の苦をなめて、捲土重來復讐戦をやるのだなア
アツハ、、、」

と始めて愉快けに五三公は笑ひ出した。此笑ひ聲は四邊の陰鬱を破つて一同は俄に陽
氣となり、敵も味方も聲を揃へて、「ワハ、、、」と高笑ひする、今迄我物顔に梢に
飛び交ひ、キヤツ／＼嘯つてゐた猿は一度に聲を潜めて了つた。

(大正一一、一二、九、舊一〇、二一、松村真砂録)

瑞 月

常磐木のいや榮ね行く足御代を

神の心は松ばかりなり

第一十七章 罵 狸 鬼 (二一八六)

松彦は宣傳使格となり、萬公、五三公、及バラモン教の阿克、タク、テクの六人は
敵味方の牆壁を忘れ、和氣霽々として俄に笑ひ興じ出した。月はます／＼冴わて木立
のまばらな此森は晝の如く明くなつて來た。

萬公は俄に元氣づいて喋り出した。

萬公「松彦さん、治國別の先生が居られなくなつた以上は、入信の順序として先づ萬公
さんが宣傳使代理を勤むべき所ですな。神の道には依姑最眞はチツトも無いのだから、
神徳の高きものが一行を統一するのが當然でせうなア」

五三「こりや萬公、何と云ふ矛盾した事を吐くのだ。入信順から云へば自分がる所だ

「云ふかと思へば、神徳のあるものが當るべきものとは前後矛盾も甚しいではないか」

萬公 「順序から云へば萬公さんが宣傳使代理を勤むべき處だが、松彦さんは後入信でもバラモン教で素地が作つてあるから神徳が高い、それだから松彦さんが宣傳使代理になられたが宜からうと云つたのだ。宣傳使の弟だつて、何にも神徳のない木偶の坊だつたら、我々は統率者と仰ぐ事が出来ない」と云つた迄だ。それが何處に矛盾して居るか。お前達は根性が曲つてゐるから怪体の處へ氣をまはすのだ。エー」

五三 「後の鳥が先になるぞよと云ふ事があるからな。何程萬公さんが先輩でも駄目だ。昨夜の言靈戦には先輩が濁つて全敗し、今晚も亦哀れつほい泣聲を出して全敗したんだから頼りのない先輩だ」

萬公 「千輩どころかい。俺は萬輩だ。それだから俺は萬公さんだ。貴様の様な東海道とは違ふわい」

五三 「東海道とは何だ。馬鹿にするな」

萬公 「それでも五十三次の五三公でないか。破れた着物は東海道と云ふじやないか。エー、襪褌布を五千三次つぎ台して着て居る乞食の代名詞だ。さうだから貴様は破れ宣傳使と云ふのだ」

五三 「誰が何と云つても、此五三公さんは萬敗さんよりも松彦さんを信用する。松は千年の色深しと云つて末代代物だからな」

萬公 「何と云つても俺には人望がないのだから仕方がない。そんなら、さうして居て俺の言靈の神力だけは認めるだらうな」

五三 「ハ、、、笑はしやがるわい。何が言靈の神力だ。全敗萬敗の破れ宣傳使奴が」

萬公 「その笑はせやがるのが俺だないか。率先して笑つたのは此萬公さんだぞ。四邊の陰鬱な空氣を拭きこつた様に笑ひ散らしたんだからな。笑ふと云ふ事は即ち歡喜の表徴だ。薄の穂にも怖ぢ恐れびりついて居つた貴様等の魂に光明を與へ、力を與へたのも萬公さんが笑ひの言靈の原料を提供したからだ。凡て人の神靈と云ふものは歡喜樂天に存在するものだからな。悲哀の念を起し嘆聲を洩らすと、神靈忽ち萎縮し、遂には亡んで了ふのだ。抑も人の神靈は善をなせば増し、惡をなせば減す、歡喜によつて發達し、悲哀によつて消滅す。かゝる眞理の濫與を理解した萬公さんは實に偉いもんだらう。五三公さんが何程藻掻いた處で、斯くの如き深遠微妙なる宇宙の眞理は分るまい。エヘン」

五三 「それ丈けの眞理が分つて居ながら、何故女々しく悲哀の語調を並べて慄ふて居たのだ」

萬公 「それは臨機應變の處置だ。婦人小兒の敢て知る所でない」

五三 「アハ、、、婦人小兒は何處に居るのだ。俺は決して婦人でも小兒でもないぞ」

萬公 「居ないから云つたのだ。そこが臨機應變だよ。時にバラモンの御三体さんを如何處置する積りだ。鱧にする譯にもゆかず、吸物にし様と思つても骨は硬いなり、ナイフはあつても之は人斬り庖刀なり、四足を料理する出刃の持合はなし、何うしたら宜からうかな」

五三 「貴様、出齒を持つてるじやないか。山櫻の萬公と云つて花(鼻)より葉(齒)が先に出て居るだらう。餅の見せられん代物だ」

萬公「何故俺に餅が見せられんのだ」

五三「それでも出齒に餅見せなと云ふじやないか。アハ、、、」

松彦「おい兩人、い、加減に押搦つて置かんか。アク、タク、テクさんが笑つてゐるぞ

三五「教にもあんな没曉漢が居るかと思はれちや、神さんの面汚しだからな」

アクは、にじり寄り、

アク「ヤア松彦の先生、さうせ人に使はれて歩く様な連中に碌な者はありませんわ。よ

う似て居ますわ、私のつれてゐる此兩人も矢張り擔ふたら棒の折れる代物です。そ

れは萬々々、話にも抗にもかゝらん五三くした奴ですわ。アハ、、、」

萬公「こりやアク、貴様の口をアク所じやないぞ。萬々々て、何だい。俺の事を諷して

居やがるんだな」

アク「萬更さうでもありません。然しまん、と云ふ名のついたものに、あんまり宜い物

はありません。慢心に自慢、高慢、我慢、驕慢、萬引に満鐵、それから病氣には

脹満、と云ふ様なもんです。も一つ悪いのは三面記者の持つて居る萬年筆、それ

から慢性の痴呆性位のもんです。アハ、、、」

五三「賛成々々、仲々バラモンにも氣の利いた奴がある。やア、もうずつと氣に入つた

おいアクさん、それほごお前は物の道理を知つて居り乍ら、何故人間の身を以て四

足の眞似をして來たのだ」

アク「別に四足の眞似はし度くなかつたのですが、友達が先へ來て待つてゐるものです

から」

五三「その友達と云ふのは誰の事だい」

アク「そこに鎮座します出齒彦命さんの事ですよ。萬公さんと云ふじやありませんか。私は又早聞きをして馬公さんと聞いて居りました。大分馬鹿の様なお顔付だからな」

五三「山口の森でも、馬鹿鹿と駒の變化した狸が現はれたじやないか」

アク「アハ、、、そりやテンゴ(冗談)ですよ。我々三人が互に罵り合つて居つたのです。然し乍ら、真正銘の人間ばかりだから、あんまり見縊つて貰ひますまいか」

萬公「そんなら此萬公さんも矢張り人間だ。あんまり失敬な事を云つちやいけないよ」

アク「此萬公さんは常世姫命の分靈山竹姫の口から生れた子でせう」

五三「何、そんな事があるものか。何故又そんな事を云ふのだ」

アク「常世姫命さんがエルサレムの都で思ふ様にゆかないので、自分の靈を分けて山竹姫に現はれ、何にかして人間の生宮を生まうと天に祈り、口から吐き出した玉が俄に膨脹して大きな四足の子となつた。そこで山竹姫が吃驚して目を圓うし、口を尖らし兩手を擴げ、體まで反りかへつて「まん／＼うまあ」と仰有つた。それから馬と云ふのだ。馬も萬も矢張り山竹姫さんの口から出たのだから、馬の先祖かと思ひましたよ。随分長い顔ですな」

五三「アハ、、、此奴あ面白い。話せるわい」

萬公「ヘン、あんまり馬鹿にして貰ふまいかい。そんならアクと云ふ奴の因縁を聞かしてやらうか」

アク「そんな事ア聞かして貰はなくとも、とつくに御存じだ。抑もアクのアは天のアだ

クは國のクだ。天津神、國津神の御水火によつて生れ給ふた天勝國勝の名をかねたる大神人だが、一寸下界の様子を探るため、アクせくと人間界にまはつて隅々迄歩いて居る。良、金神さんだよ。悪に見せて善を働く神様だから、暗夜を照らすのはアーク燈と云ふじやないか。あんまり口をアークとすいたんを喰ひますぞや」

萬公「アハ、、、ク、、、じゃ、抑もアクと云ふ奴あ、凡て始末におへないものだ。その灰汁がぬげさへすれば食へぬものでも食へるだらう。果物でも野菜でも灰汁の強い奴は水に漬けておくのだからな。藁にだつて灰汁がある。溝に流れてゐるのは皆惡水だ。その惡水に喜んで棲んでゐる奴が所謂溝鼠だ。鼯も矢張り溝水に近い處に棲むものだ。つまり要するに即ちアクと云ふのは溝狸の事だ。アハ、、、」

五三「國常立之尊と溝狸とは天地霄壤の相違じやないか」

アク「至大無外至小無内、無遠近、無廣狹、無大小、過去現在未來の區別なく、或時は天の大神となり、或時は狸は云ふも更、蝶蜋蚯蚓と身を潜め、天地の神業に参加するのが即ちアクだ。良、金神様は惡神崇神と人に云はれて三千世界をお構ひ遊ばしてムつたと云ふ事を三五教では云ふじやないか。三五教のアと國常立のクと頭と頭をとつて、アクさんと云ふのだからな。馬の子孫とは大分に譯が違ふんだ。ヒヒーンだ。ヒ、、、」

松彦「ウツフ、、、何だか知らぬが人間界を離れて、畜生國の會議に臨席した様な氣がするわい。もつとらしい問題を提出するものはないのかな」
アク「そりや何程でもありますよ。バラモン教に於て智識の寶庫と稱へられたる私です。からな」

萬公「何とまあ吹いたものだな。三百十日が聞いて呆れるわ。フ、フ、」

斯く話す時しも一天黒雲に包まれ、俄に眞黒の暗となつて了つた。萬公はそろ／＼慄ひ出した。

萬公「オイ、い、い、五三公、もつと此方や寄らんかい。さう遠慮するものじゃないわ」
五三「お前から此方へ寄つてくれ。かう暗くては仕方がないわ。俺や何だか體が地にくつついた様な氣がして動けなくなつたのだ」

萬公「おい、何うやら怪しくなつて來たぞ、何程氣張つても腹の底から慄ふて來るじやないか。何うも合點がゆかぬ。歡喜樂天の奴、いつの間にか遁走して了ひよつた。俺の神靈もそろ／＼脱出したと見わるわい。五三公お前だけなつと、しつかりしてゐてくれよ」

五三「何、心配するな。松彦さんがついてゐるわい。あんまり頬を叩くから神様から戒めを受けたのだ。サア祈れ」

阿克「もし皆さん、さうも怪しくなつて來たじやありませんか」

五三「本當に氣遣ひな狀況になりましたな。皆さん御遠慮は要りません。一所へ密集しませうか」

タク「おい阿克、一所へ寄つちやいかないよ。もしも空から爆弾でも落ちて來たら全滅だ。何事も散兵線が安全だからな」

阿克「それもさうだ。然し何とはなしに一所へ守護神がよりたがつて仕様がないわ」
タク小聲で

タク「この暗がりに三五教の側へ寄ると、あの懐劍でグサツとやられるかも知れんぞ。

あんまり氣を許しちや大變だからな」

アクは故意と大きな聲で、

アク「何、暗がりて側へ寄ると、三五教が懐劍で突くかも知れんと云ふのか。何突いても構はんさ、突かしておけばよいのさ。敵も味方も牆壁をこつて親しくつき合ひと云ふのだから、つくのは結構だ。つかれるのも結構だ。やがて黒雲排して月も出るだらう」

タクは袖を引つ張つて

タク「おい、アク、さう大きな口を開くもんじゃないわ。澤山の託宣を、そんな大聲でさらけ出されちや堪らんじやないか」

アク「大聲の方がい、のだよ。大聲俚耳に入らずと云ふてな。却てこそく話をしてる

ると聞わるもんだ」

斯く話してゐる處へ、暗の中から光の無い薄青い火の玉が永い禪を引ずつて、地上五六尺の處をフワリ／＼とやつて来た。

松彦は火の玉に向ひ

松彦「廻れ右へ」

と號令を掛た。火の玉は松彦の言葉に従ひ俄に頭を轉じ右の方へクルリと廻つた。さうして松彦の額のあたりを尾にて撫で乍らスツと通り、中央にブン／＼と呻つて尾を直立させ火柱を立てた様になつた。

萬公「松彦さん、「廻れ歸れ」と云つて下さいな。随分厭らしいもんがやつて来るじやありませんか」

松彦「アハ、、、ありや狸だよ。最前から狸々々罵つたお前の言霊が實地に現はれたのだから、お前が處置をつけねば誰が處置をつけるのだ。それ／＼火の玉がお前の方へ近寄つて来るじゃないか」

萬公「こりや火の玉、貴様の本家は此處じゃないぞ。バラモンのアクさんだ。アクさんの方へトットと行け。戸惑ひするの程がある。エー」

火の玉はジリ／＼と萬公目蒐けて迫つて来る。萬公は一生懸命になつて両手を組みウン／＼と鎮魂の姿勢をこつた。火の玉は益々太く長く膨脹するばかり、見る／＼間に鬼女の顔が現はれ頭に三本の蠟燭が光つて來だした。胸には鏡をかけてゐる。夜前の楓姫そつくりである。萬公は目を閉ぎ耳をつめて蹲んで了つた。アク、タク、テクの三人はアツと云つたきり大地に横たはつた。目をぎよろつかせ口を開いたぎり、ア

ファンとしてゐる。怪物は長い舌をペロ／＼出し乍ら嫌らしい聲で、

「萬公、五三公、アク、タク、テクの五人の英雄豪傑、大雲山から迎へに來たのださア俺について出てムれ。(大聲) 違背に及べば噛み殺さうか」

五三「た、、、狸の化物奴、な、、、何を吐しやがるのだ。だ、、、誰が大雲山迄行く奴があるか、ば、馬鹿」

と冷汗をかき乍ら嘔鳴りつけた。怪物の姿は象が尻を放つた様にボスンと云つたまゝ消れて了つた。中天に昇つた月は、もこの如くに皎々と輝いてゐる。四邊を見れば一匹の白い動物が太い尾を垂らしノソリ／＼と森の中を目蒐けて逃げて行く。

松彦「アハ、、、又やられたな」

一同「く、、、」

とつき合ひ笑ひをやつてゐる。これより松彦は五三公、萬公、アク、タク、テクの五人を従へ夜明けを待つて浮木の森をさして出で、行く。

(大正一一、一二、九、舊一〇、二一、北村隆光録)

瑞 月

神人の夢にも知らぬ立替は

生ける昔の神の勳功

第一八章 一本橋 (二一八七)

松彦一行は野中の森を後にして、宣傳歌を歌ひながら浮木ヶ原をさして進み行く。此處には河鹿川の下流が横たはつて居る。此の河は、ライオン川に注ぐと傳へられて居る。

可なり廣い河に、天然の河の中の岩を土臺として、一本橋が架けられてある、橋を渡つて歸つて来る二人の女があつた。一人は中年増、一人は十五六才の少女である。一行六人は橋の詰めに立つて清らかな激流を眺めて息を休めて居た。萬公は二人の女に向ひ、

万公「随分、烈しい流れだが、こんな一本橋を女の身としてよく渡れたものだなア、一

体お前さんは、何處から來たのだ」

女「ハイ私 は浮木の里の者でムいますが、此間から澤山の軍人が私の村に陣取り、女と云ふ女を軒別に徴集して炊事をさせたり、いろ／＼と辱たりするので、誰も彼も皆逃けて仕舞ひました。私は婆の事なり、相手にはして呉れませなんだが、だん／＼と女が減るにつけ、婆でも小女でも構はぬ、女でさへあれば引張つて歸りますので我村を逃げ出し、此橋を渡つて小北山の神様のお籠へ身を隠して居りましたがあまり澤山の女で寝る所もなく断られて、親子二人が此處迄歸つて來たのでムいます」

アク「ウン、女計りが小北山に隠れて居るは一体幾十人程居るのだい」

女「ハイ、一寸百人計り集まつて居りますが私は後から行つたものですから、部屋と云

ふ部屋は酢司詰の有様で軒下にも寝る所がないのでムります。それ故歸つて参りました。此先何うしたらよからうかと思案に暮れて居ます。貴方の笠には十曜の紋がついて居ますが、不思議の事には小北山の神様にも十曜の紋がつけてありました」

アク「さうして何と云ふ神様が祭つてあるのだ」

女「ハイ國治立命様と承はりました」

アク「ハテ國治立命様を祭つてあるは合點が往かぬ。三五教の一派ではあるまいかなア」

女「何だか知りませんが、小北山の神様と云ふて参つて居ります。一寸外からは分かりませんが、あれ御覽なさい、細い煙が立ち上つて居りませう、あすこが神様を祭つてある所です。そして門もあり、澤山の神様も祭つてあつて一々名は覺て居ません

が何でも六ヶ敷名のついた神様計りでムいます」

アク 「松彦さん、此婆さんの話は耳寄りぢやありませんか。國治立神様が祭つてあること云ひ十耀の紋がついて居ること云つたでせう。ひよつこしたら治國別の先生が、其處へ往かれたのではありますまいかな」

松彦 「さうでもあるまいが、その小北山とやらへ一寸立寄つて様子を考へて見度いものだなア」

アク 「そんならお伴致しませうか、オイ、五三さん、萬公さん、タク、テク、お前等も賛成だらうなア」

四人一度に「賛成々々」とばつを合した。

アク 「ヤア小生の提案を満場一致賛成下さいまして有り難うムいます」

万公 「ハ、、、、アクさん、この二人の女は見殺にする積りかな、何とてかして連れて往つてやらねば、可愛さうぢやないか。百人も居る處へ二人位融通のつかぬ筈はあるまい。此婆さんは何かやつたのぢやあるまいかな」

アク 「さうだなア、やりよつたのだらう。随分手癖の悪い奴が、女の中にもあるからなア」

女 「これくゝあんた方、私を手癖が悪いと仰有つたが、さうどんくゝと仰有るからには何ぞ證據がありますかな、サアそれを聞かして貰はう、こんな事を聞いては、なんほ女だに云ふて聞き捨てになりません、盗人の名をきせられて、先祖に對して申譯がありますか、娘にだつて合す顔がない。何を證據にそんな事を仰有いますか」と眉を逆立て、睨みつける。

アク「ヤアこいつは失敗つた、まことに粗疎千萬の事を申上りました。つい口が迂りましたなア」

女「口が迂つたの、足が迂つたのミ、そんな事で云ひ譯が立ちますか。私に着せた濡れ衣をサアさうして乾かして下さる。お前さんも世界の人を導いて歩くお方だと思へるが、そんな事でさうして神様の御用が出来ますか」

アク「イヤ誠に閉口頓首だ、やられた哩」

万公「オイ、アクさん、態を見ろ、餘り言靈を使ひ過ぎるミ、七尺以上の男が女に尻古まされるやうな事が起るのだ。アハ、、、」

女「さうするミお前はアクミ云ふのかい、道理で萬引の様な面をしてゐるわい。オ、恐ろしい〜、こんな所で追剥せられては大變だ、サア菊さん長居は恐れ、早く歸

りませう」

お菊「お母さん、浮木の里へ歸ればバラモンの軍人に追剥をされたり、念佛講に合はされたりしては耐りませんから、一層此處へ身を投げて死にませうか。小北山へ行つても放り出される、こゝへ来れば追剥にせられる。家へ歸れば軍人に訶まれる、何うする事も出来んぢやありませんか」

五三「これ〜母子御兩人さん、我々は決して盗人ぢやありませんや、三五教の宣傳使のお伴だ。決して人を難めたり、追剥なんぢはして呉れミ云ふたて致しませんから安心して下さい。大切な命をこんな所で果すミは悪い見だ。氣の短いにも程がある。これお菊さん、この叔父さんはそんな怖い者ぢやない、まア安心してお呉れ」

お菊「イエ〜お前さんは泥棒だよ。そこにゐる三人のお方は、此間私の村へ出て来て

「女徴集だ」と云つて、搔つ攫ひに來たお方ぢや。顔に見覺があります。そんな事を仰有つても私は承知は出來ません。なアお母さん、さうでせう」

母

「成る程、その三人の男は家へもやつて來た男だ。隣のお龜を攫へよつたのはこの三人だ。バラモン教の目付けだ」と云つて威張りよつた。こら三人の奴、此婆はこう見ても浮木ヶ原のお寅と云つて若い時には賭場も開張して居つた白浪女だ。

もはや娘が命を捨てる覺悟した以上は、このお寅も足手纏ひがなくて力一ぱい活動が出来る。サア小童共このお寅が河へ投げ込んで村の人の仇を打つてやらう。サアさうぢや」

と目を釣上げ、偉い劍幕で睨めつけた。アク、タク、テクの三人はお寅婆の勢に辟易し、後ずさりして頭を掻いて居る。

万公

「ハ、、、、オイ、アク、貴様等三人偉さうに云つて居るが随分悪い事をしよつたなア、年貢の納め時だ。一つ婆アさんとこの激流に投げ込まれて見よ、俺も何なら婆アさんの助大刀をせん事もない」

アク

「これ〜お婆さん、そう怒つて呉れては困る。俺は役目で止むを得ず女徴集と出たのだ。役目だと思ふてまア見直して呉れ」

お寅

「何と云つてもお寅婆が死物狂ひ、許すもんかい。これや萬公とやら貴様も同類であらう。これお菊、お前は死ぬ覺悟を極めた上は一人死ぬのも勿体ない。これ等六人を残らず河へ投げ込んで、大活動をし、天晴れ勇者となつて、冥途に行つた時に其勇名を誇らうぢやないか」

お菊

「お母さんそんなら一つ私も死物狂の活動を致しませう。假令一人でも道連にして

やらねば腹が癒へませんからなア」

松彦は初めて口を開き、

松彦 「もしく、お寅さん、お菊さん、先づお静まりなさい、決して我々は悪人ではありませぬよ。バラモン教の中にもたまには善人が混つて居りますからなア。此三人は成る程女徴集に往つたのは事實でせう。併し今日は最早改心をして三五教の宣傳使のお伴して歩いて居るのだから、さうぞ許してやつて下さい」

お寅 「お前さんは一寸賢さうな顔をして居るだけに一寸分つた事を仰有る。許し難き餓鬼なれども、今日は見逃しておきませう。そのかはり三人の餓鬼に「さうも悪かつた」を犬蹲ひになつてお詫をさせにや承知しませんよ。命だけは助けてやります」

万公 「オイ、アク、テク、タク三人薩張顔色無しだナ、女の一人や二人にこみわられて

慄つて居るやうな事で、さうして男の顔が立つか。是を思へば悪い事は出来んものぢやなア。アハ、、、」

アク 「何も俺は此婆さんにあやまりの條がないのだ。婆さんや娘の體に指一本さへたのでもない、隣の家まで往つたのみだ。オイ婆さん、隣の家を敵打だなんて舊いぢやないか。お前も随分頭が舊いなア」

お寅 「エ、つべこべに今の奴は青表紙や蟹文字を囓つてけつかるから、そんな小理窟を吐すのぢや、強太う致して謝罪らんなら謝罪らんでもよい。此方にも覺悟があるのだから」

アク 「ハ、、、、剛情な婆だな、江戸の敵を長崎で打たうとして居る。オイ、俺達三人はこの一本橋を向ふへ渡つて、婆の來んやうに、この橋を落してやらうぢやないか

タク、テク、サア来い」

と尻を引き捲り一本橋を無性矢鱈に渡らんとし慌てアクは渦まく激流にドブンと落ち込んだ。タク、テクの兩人は辛うじて向ふへ渡つた。お寅とお菊は兩手を上げて、ウワイ／＼とぞめいて居る。

松彦「萬公さん、五三公さん、これやかうしては居られない。婆さんも婆さんだがアクを助けてやらねばなるまい、サア渡らう」

と云ひながら松彦は先に立つて一本橋を渡りかけた。續いて五三公も渡り出した。萬公は

万公「アクを助けるには妙だなア、俺だつたら善を助けるがなア」

とほざいて居る。後からお寅は萬公の首筋をグツと引き、お菊は足を凌へ、ドスンと

河端に倒して仕舞つた。

万公「バ、、婆さん、ナ、、何をやるのだ。俺はス、、些しもし、、知らんぢやないか」

お寅「知つても知らんでもよいわ。貴様は敵の片割れだから親子寄つて集つて命を取つてやるのだ」

萬公は吃驚して、

万公「オイ松彦さん、五三公さん、人殺だ、救けて呉れ」

と聲を限りに叫んで居る。激流の音に遮られて向ふ岸には聞えなかつた。四人はアクを助けん右往左往に周章へ廻つて居る。アクはさうしたものか二三町下手の岸に漸く泳ぎつき、眞裸體となつて濡れた着物を壓搾しかけた。

松彦 「ア、もう大丈夫だ、矢張アクは偉い奴だ、悪運強いとは此事であらう、ハ、ハ、ハ、」

五三 「もし松彦さん、萬公が居らんぢやありませんか」

松彦 「何、萬公が居らん」

と云ひながら向ふの岸を見るに、二人の女に押へられ藻掻いて居る。

松彦

「タク、テクの兩人はアクの方へ往つて世話をしやつて呉れ、五三公は御苦勞ぢやが一本橋を渡つて萬公を助けて來い」

五三

「ヘイ承知致しました、併し貴方はさうなさるお積りです」

松彦

「私は宣傳使代理だから先づ中央に坐を占めて兩軍の戦闘振を講評する積りだ、さア早くゆかないか」

五三 「エ、仕方がない」

と一本橋を又もや渡り、

「これやッ!!」

と嘯鳴りつけた。お寅にお菊は平氣なもので、

お寅

「これお前さん何を邪魔をするのだ。向ふに先生が待つてゐるぢやないか、とつと、あちらに往かつしやれ。此奴は萬公と云つてな、我の娘をチヨロマかした奴だ、お菊の姉のお里が野良へ往つた處を待ち伏をして野倒しをやり、さうく夫婦氣取りで、一年計りも私の家で暮して居つた奴ぢや。お里は悪縁で腹が膨れ、其ために難産をした揚句に死んで仕舞ひよつた。さうするにこの薄情男奴後足で砂をかけて逃げてしまひよつたのだ。さここへ往つたかを探して居たが、天命通れず此處で廻り合

つた、娘の敵だ、さうしても殺さねや承知しないのだ。目が悪いと思ふて萬公の奴知らん顔して居るが、そんな事分らぬ婆さんぢやない。娘の敵この鐵拳でも喰へ」
と握り拳をしてコン／＼と叩く。

万公 「アイタ、、、、さうぞ勘辨へてお呉れ」

お菊 「姉さんの敵承知しないぞ」

と又拳を固めてコン／＼と打つ。

万公 「オイ五三公の奴、助けて呉れないか。私も三人や四人の女に弱るやうな男ぢやないが、お寅婆アさんは柔道百段だから、グツと掴まれたら、さうする事も出来ないのだ」

お寅 「オホ、、、これ五三公とやら指一本でもこの體にさへたら承知せんぞ」

五三 「これや手の出しやうがないわい、滅多に命を取るやうな事もあるまいから、精出して叩いて貰へ。なアお婆さん何うぞ強つく、柔かう頼みますよ」

お菊 「お母さん、こんな腰抜け男を叩いても仕方がない。もう勘忍してやりませうか。それよりも浮木ヶ原へ歸り、ランチ將軍の陣營に飛び込み、斬つて／＼斬り死をしたら方が死甲斐があるかも知れませんぜ」

お寅 「さうだ、こんな蠅虫の二匹や三匹相手にしたつて仕方がない、許してやらう。命冥加の奴だ。今後はきつと慎め」

万公 「ハイ謹みます」

お寅 「私の云ふ事を何時迄も覺て居つて、あの先生の云ふ事を好う聞いて善心に立ち歸るのだ。サア三千世界の放ち伺ひ、何處へなりと勝手に往け」

と掴んで居た手をバツと放した萬公はムクムクと起き上り、

萬公「婆さん大きにお世話になりました。お蔭で肩の凝りが癒りました」

と捨臺詞を残して逃げて往く。

お寅「仕方ない男だな。彼奴はまだ、せせう骨が直つて居ないと思ねる。後より追つ
ついて、も一つ折檻してやらう、サアお菊」

と一本橋を渡らうとする。五三公は両手を擴げ、

五三「お婆さん、まあ〜待つて下さい、私がとつくと言ふて聞かしますから、もうこ
れ切り許してやつて下さい。貴女も一旦許すと仰有つたのだから、もう、これ切り
許して下さい。さう執念深く追駈ないでもよいぢやありませんか」

お寅「憎い奴ではあるけれど、たゞへ一年でも可愛娘の可愛がつて居た男だから、十分

言ふて聞かして懲してやり、一人前の男にしてやりたい計りに、かうして母子が手
荒い事をしたのだ。萬公を打擲したのは矢張可愛いからだよ。何しに憎ふて頭の一
つも叩かれやうぞ」

と云ひながら涙を袖に拭ふ。お菊も顔を隠し涙をそつと拭いて居る。

五三「ア、親の恩と云ふものは有り難いもんぢやなア。お婆さん左様なら」

と云ひ捨て、又もや一本橋を慌しく渡つて仕舞つた。

(大正一一、一二、九、舊一〇、二一、加藤明子録)

第一九章 婆 口 露 (一一八八)

松彦は山道の傍に屹立せる大岩の傍に、五人の従者を集め息を休めて話に耽つてゐる。

松彦「アクさん、随分危ない事だつたな。マア結構だつた」

アク「婆におごかされて走る途端に足ふみ外し、随分冷つてい目に逢ひました。併し乍ら水泳に得意な私ですから助かつたのですよ。タク、テクの兩人だつたら、サツバリ駄目ですわ」

松彦「そらさうぢや。マアよかつた。萬公さん、お前は偉う親子の女にやられて居つたぢやないか。随分弱い男だなア」

万公「へーへ、惡に弱い、善に強い萬公さんですもの、無抵抗主義の三五教でなかつたら婆を河へほりこんで了ふとこでしたけれども、成る可く直日に見直し聞直して、無抵抗主義を固く守つてをたつたのですよ。さうしたところ婆と娘とが按摩をしてくれました。肩をうつやら腰をもむやら、足を引ぼるやら、おかげで體が樂になりましたよ」

五三「アハ、、負惜みのつよい男だな。キヤア／＼云つて泣いて居つたぢやないか」
万公「ナーニあれはこそばい、そこを揉むもんだから笑つてゐたのだよ。貴様には泣いた様に聞ゆるか」

五三「それでも人殺、助けてくれと云つたぢやないか」
万公「ウン一寸テングに言つて見たのだ。その証據には婆さんと娘とが泣いてをたつたぢ

やろ。俺は一寸も泣きはせん、大丈夫たるもの女位に泣かされてたまるかい」

五三 「モシ／＼松彦さん、此奴の秘密を探つて來ました。仕方のない奴ですて」

松彦 「ナニツ、秘密をさぐつたミ、そりや面白い。こんな事だ、差支なくば聞かしてくれ」

万公 「コリヤ／＼五三公、他人の秘密をあばくやうな不道徳はないぞ。慎まんかい」

五三 「そんなら仕方がない沈黙しようかな、お里がわかるミ氣の毒だからなア」

万公 「コリヤお里の事は云はんやうにしてくれ。さう親友の事を公衆の前にさらけ出すもんぢやないわ」

五三 「松彦さん、あー云つて頼みますから、或時期迄保留しておきませう。その代りに萬公が私の命令を奉じない時には、さらけ出します。なア萬公、その條件附で暫く

沈黙を守る事にしやうかい」

万公 「さうぞ頼む」

五三 「ヨシ／＼その代りに俺の尻を拭けミいつても拭くのだぞ。滅多に違背はあるまいなア」

万公 「ヘン馬鹿らしい。誰が貴様の尻をアタ汚い拭く奴があるかい。體ばかりか心迄汚い代物だからなア。吝ん坊で悪口言ひで穴さがしで、奸黠で、狡猾で、不道徳で、權謀術數家で、強慾で丸で旃陀羅のけつに醬油の實をつけて甜つてるやうな奴だ。こんな奴に秘密を握られて居るミ一生頭が上らんから、イツソの事俺の方から松彦さんの前で公開をするから構ふて呉れな。オイ五三公さん、急らい御心配をかけた。別に人のものをチヨロマカシたのでも無し、聞いたら涎の出るよなポロイ面

白い話だから、別に耻にもなるまい。誰だつて多少のロマンスはあるんだからなア。女なんか胸が悪いと云ふやうな顔をしてる乍ら、人の見んところでは、女に湯巻の紐でしばかれて涎を繰つて居る奴が多いのだから、多少の戀物語があるのは寧ろ誇りだ。貴様の様な唐變木では、春が来ても花は咲かせんぞ」

五三 「何うなと勝手にほざいたが好いわい。俺やもう干渉せんわ。その代り貴様が失敗しても高見から見物するから、さう思つたがよからう」

アク 「なんだか様子ありけな口振だな。そのロマンスを聞たいもんだよ」

萬公は肱を張り、

萬公 「きかしてやらう、謹聴せい」

と今や話の糸口を解かんとしてゐる所へ、以前のお寅、お菊はスタ／＼とやつて來

た。

お寅 「モシ／＼萬は其處に居りますかなア、あの悪たれ男は」

五三 「それ、やつて來た。萬公、喜べ、モ一遍按摩をして貰つたら何うだ」

萬公 「お婆さん、モウ澤山でんいます、イヤもうズント改心いたしました。何卒歸つて下さいませ」

お寅 「イヤ／＼未だ改心が出來て居らぬ。娘と二人よつて折檻をしてやるのに結構な按摩で肩の凝が下つたと捨臺詞を残して逃げて行くよな男だからな。死なねば治らぬカク病だ、エーエ、骨の折れた事だが思ひ切つて荒療治をしてやらう。オイ萬、此方やへ來い」

萬公は小さくなつて慄ひ戦いてゐる。

お寅 「アハ、、、やつぱり何處か心に光明があるぞ見れて、耻を知つて顔を隠しよるマア頼もしいものだ。コレ〜お前さんは萬の親方と見ゆるが、こんな厄介物を連れて旅をなさるのは、嘸お骨が折れる事でせう。此婆が物語をするのを聞いて下さいませ。此奴の缺點をよく呑み込んでおいて貰ひませんと、貴方の御迷惑になるぞいけませんから、後へ引返して参りました」

松彦 「何事か存じませんが承はりませう。此男には一つの秘密があるさうですなア」

万公 「お寅はん殺生な、コレお菊、さうぞお前仲裁して止めてくれんか。あんな事はれちや顔が赤くなつて、ついて行く事が出来んからなア」

お菊 「お母さん、一つか二つ程にして、みんな云はないやうにして上げて下さい。押かけ婿に入つて來た事やら、私を手込にしかけた事は云はないやうにしてねー」

万公 「コラお菊、そんな秘密が何處にあるか。肝腎の事を皆云ふて了ふたぢやないか。馬鹿にするない」

お菊 「私は子供上りだから何云ふかshれないよ。氣にかけずに許して頂戴ね」

五三 「アハ、、、ウフ、、、到頭面の皮をむかれよるのか。イヒ、、、」

アク、タク、テクの三人は手を拍ち踊り上つて喜ぶ。

お寅 「松彦の先生様、此の婆の云ふ事一通り聞いて下さい。此の萬と云ふ男は酔でも蕘蕘でも行かぬ動物でムいますよ。一昨年の冬だったか、風のビュー〜と吹く夕間ぐれ、家の門前に見すほらしい乞食がふるうてゐると、僕の者が奥へ知しに來たものですから、私も小北山の神様を信心してゐるのだから、人を助けるのは神様の御奉公だと思ひ握り飯を一つ持つて門口迄出て見れば、若布の行列か、シメシ

の親分と云ふよなツツレの錦を着て、蓆をかぶつて慄うて居る奴乞食があるぢやありませんか。そこでアー可愛想に同じ様に神様の息から生れた人間だ、助けてやるのが神様への孝行だと思ひ、握り飯を一つお盆にのせて、アタ汚い乞食に御叮嚀にサア嘸御ひもじうムいませう。さあ、これでも食べて歸つて下さいと云ふと、その乞食は黒い顔から、眼をむき出し、吐すことには「アー世界に鬼はない、誠に有難うムいます。此の御恩は忘れません」と米搗バツタの様に腰をベコ／＼百遍計りも曲けて拜むぢやありませんか、私も不愼が重なつて何とて湯巻の古手でも探して被せてやりたいと思つて居りました。お盆に握り飯をのせて突出して居るのに取らうともせず、腰ばかりベコ／＼さして居る。辛氣くさくて仕方がないからお前さん、此の握り飯が氣に入らんのかいと云ふと、その乞食の云ふには今近所で

葬式の残りの御馳走を鰹腹頂いて来たところだから、握り飯は欲しくはありません、暖かいお茶が一杯頂きたいと云ふので、私も浮木の村のお寅と云つて仇名を取つた女侠客だから人を助けてやらん譯にも行かず、苔だらけの手を握つて奥へつれて行き、たぎつて居つた茶を出して、サア之をお上りなさいと茶碗を添へて出しておきました。而して奥の間へ入つて障子の破れから考へてゐると生れついでに乞食だと思ひ、アタ行儀がわるい。土瓶の口から煮切つた茶をグット呑み込み、喉に焼傷をして目をクル／＼とむき、泡を吹き七轉八倒してゐるぢやありませんか。エー怪体のわるい、ド乞食を引張込んだ者だと思ひ、あわて、行つて見れば、大切にしておいた青土瓶はボカツと二つに破れ、切角煮かした茶は疊にこぼれ、疊が御馳走とも何とも言はずにけろりとなめて、細い目を澤山ならべて睨んでゐるぢやあ

りませんか。ホ、、、そのド乞食が仰向に倒れてゐるこを見れば、煤で煮たよな禪を垂らし、吊柿のよな眞黒氣のものを出して倒れてゐやがる。サア大變だ。家内中がよつてたかつて水をのませ、いろ／＼と介抱した結果、よう／＼息を吹きかへした。併し乍ら舌をやけどしたものだから、舌も口も腫れ上り、國所を尋ねようにも名を聞こうにも物が言へないので聞く譯にも行かず、筆紙を持つて来て名を書けと云つても、此奴は明きめくらと見わた一字もよう書かず、仕方なしに籤醫者を頼んで来て裏門から灌腸して到頭物を云ふ様にしてやりました。それから虱だらけの衣物を油をかけて、焼して了ひ、亡くなつた爺さんの一番古い衣物を着せてやつて、行く處もない代物だと云ふから下僕につかつて野良仕事に使つて居りました」

五三 「そら誰の事ですか」

お寅 「云はいでも知れたこつちや、此の萬のこことだよ」

五三 「何ミマンのわるいこに出會したもんだなア」

アク 「アハ、、、面白いノ、お婆さん、しつかり頼みますデ。千兩／＼」

万公 「コリヤ、アクの奴馬鹿にすない、俺は瑞のみたまだ。アクの鏡が映つゐるんだから俺の事ぢやない、世間の奴の悪い事が奇麗なみたまの俺にうつつたのだ。其のもりでお婆さんの云ふ事を聞けよ。取違ひと慢心は大怪我の基だから、お婆さんの云ふ事をよく味はふて聞くがよいぞよ。人の事だと思へば皆我身の事であるぞよ。世界中がこうなつて居ると云ふ事を變性女子の身魂にさして見せてあるぞよ。……と云ふ教をきいて居るだろ、それが俺の事だから……」

松彦「フ、、、お婆さん、その次を願ひます」

お寅「一寸此處で中入なかいりいたしましたしまして、又後はゆる／＼に御静聴ごせいしやうを煩わづらはします。オホ、、、萬公まんこうさん随分耳みみが痛いたからうなア」

万公「チョツ」

お寅「アア、こんな事云こといひたい事ないけれど、これも萬公まんこうの將來あたいの爲ためだから、モウ一息先生いしせんせいのお耳みみをわづらはしませうかなア。コレ萬公まんこうさん、お前まへが決けつして憎にくうて云いふのぢやない、たゞへ三日かでも因縁いんえんがあればこそだ。お前まへの爲ために云いふのだから、聞きいて下さい。さうせチツトは耳みみが痛いたいのは請合うけあひだが、罪亡つみなほほしだと思おもつて辛抱しんぱうしなさい」

五三「ナント御親切ごしんせつな御婆おばあさんだなア、俺おれもこんな親切しんせつに云いふて呉くれるお婆おばあさんに逢あひ

たいわ。それからお婆おばあさん、後あとは何なにうなつたのだい」

お寅「それからお前まへさん、此この萬まんを野良仕事のらしごとにやつて置おいたところが、鼠ねずみかなんどのよに大根だいこんを作つくつておけば嚙かぢつて食くふ。蕪わらびをひいて食くふ、サツマ芋いもは根ねからひいて食くつて了しまふ。まるで龍土りゆうどを飼かうてをるよなもんだ。こんなものを飼かうてゐちや百姓ひやくしやうせんがましたと思おもつて、仕方しかたなしに娘むすめの見守り役みまもりやくにしてやつた。それがサツバリ災わざはひの種たねとなつたのだ。此この婆おばあが熱病ねつびやうをわづらつて今日けふか明日あすか分わからんといふやうになつたので、孝行かうかうな娘むすめのお里さとが此こ萬まんをつれて氏神うぢがみの社やしろへ参拜さんはいをしたのだ。ソールと何時いつの間まにかお里さとの腹はらがポレンと太ふつて來きた。婿むこも貰もらはんのに腹はらがふくれるといふのは、コリヤ屹度きつど脹滿ふくらに違ちがひないに籤醫せんい先生せんせいを頼たのんで見て貰もらつたら、娘むすめの氏神参りうぢがみさんりの御かけおかけで私わたしの病氣びやうきは直なつて了しまうたが娘むすめが脹滿ふくらになつて了しまつた。醫者いしやも醫者いしや

だ。脹満だ〜といつて矢鱈に苦いものを飲ます、ソレでも十月目にはターククの口が開いてホギヤアと一聲、娘はビツクリして其場に氣絶して了つたわいの、ア〜。それから上を下へと大騒動を始め、朝鮮人蔘を飲ましたおかげで、ヤツトの事で氣がつき、おかげで娘の生命はとりとめたが、肝腎の乳が出んもんだから、生れた子は骨と皮になり、到頭死んで了つた。アーン〜」

五三 「ソリヤさうも氣の毒な事だなア。そしてその子は一体誰の子だい」

婆はところまたらに残つた齒をかみしめ、イーン〜と願をつき出し、妙な手つきで萬公の肩をこづくやうな事をして、

お寅 「此奴だ〜、此のガキだよ。アーン〜」

アク 「オイ萬公さん、まんざらでもないの。エー、一杯おごつて貰はうかい」

万公 「ウン」

お寅 「それからいろ〜と詮議の結果、お里が言ふには萬さんの子だ。こうなるのも前生の因縁づくちやから、何卒乞食上りの萬さんでも私の夫に違ひない。此人と添はしてくれなければ死にます〜と駄々をこねるのだ。此道ばかりは親が何うする譯にも行かず氣に入らぬ男だと思つたが、何を言ふても肝腎の娘がゾツコン惚こんでゐるのだから、此婆も我を折つて泣き寝入りにしたのだ。所が運の悪いお里は産後の肥立ちが悪うて、歸らぬ旅に行きました。アーン〜」

と涙を拭ふ。

五三 「ナント萬公といふ奴は罪な事をしたもんだなア。乃物持たずに二人も人を殺しやがつたなア。道理で野中の森で暗うなるにビリ〜ふるひやがると思つた。やつば

り此う云ふ原因があるのだから、怖ろしがるんだ哩」

万公「コリヤ五三公、批評はやめてシツカリきけ。これからが性念場だぞ」

と燒糞になつて怒鳴り立てゝゐる。

お寅「それから此萬の恩知らず奴、増長しやがつて、まだ蕾の花のお菊を手込めにし、二代目の女房にしやうと企みをつたのだ。流石に偉い女だからお菊はボンと臆をくはした。すると萬公奴、妹に臆をくはされて逢はず顔がないと遺書を書いて我家を出た切り、踏んだ花が、つぶれたとも、河童の尻がくさくさないとも云つて來ず本當に困つたガラクタ男だ。妾は今日小北山の神様に、浮木の森の村に一時も早く軍人が居らぬ様になりませうと祈つて居る所へ、娘に神憑があり「今早く行けば萬公に出逢ふ」この御指圖で、實の處は萬公に意見をしてやらうと思つて出て來たの

だ。此上の神様には澤山な人がこもつて居るが、まだ三人や五人寝られん筈はないが、萬公の様子を探らうと思つてあんな事を云つて居つたのだ。……松彦の先生さん、私の家では斯ういふ事をやつて居ましたから、嘸世間でも悪い事をして歩くでせう。何卒氣をつけて眞人間にして下さい。因縁あればこそ娘の腹をふくらしたのですから、娘の惣て居つた男を憎いとは思つて居ません、何卒一人前の人間にして貰ひたいと思つて再び引返して來ました」

と涙乍らに語り終つた。

松彦「何もかもわかりました。何卒御安心なさいませ。私ばかりか治國別様といふ立派な先生がついて居られますから、萬公の事は御案じ下さいませな」

お寅「ハイ有難うムいます、何卒よろしう御願ひいたします。サアお菊、失禮して一足

御先へ行きませう。お龍さんが待つてゐられますから」

お菊「皆さん御面倒いたしました。一寸お先へ失禮いたします」

松彦「左様ならば御機嫌よう」

五三「アハ、、、」

アク「オツホ、、、」

タク、テクは飛び上つて「ワツハ、、、面白く、オツホ、、、」

万公「アア、悪い夢を見たものだ。薩張り俺の顔は臺なした。ドーレこれから一つ花

々しい功名をして世界に名を残し、お里の靈を慰めてやらうかなア」

五三「アハ、、、萬公、到頭貴様のお里が解つたぢやないか。イヒ、、、」

(大正一一、一二、九、舊一〇、二二、外山豊二録)

第二〇章 脱

線

歌 (二一八九)

松彦はお寅、お菊の後を見送つて

松彦「萬公がお寅婆さんに巡り會ひ

恨の数々お菊さん哉。

萬更に捨てたものではあるまいと

たかを括つた五三公の口。

川の邊で昔の垢を流しけり

萬公末代取れぬ罪とて。

荒波の伊猛り狂ふ河鹿川

婆 口 露

丸木の橋を渡る危さ。

猿叫ぶ野中の森を立出で、

婆さんはまつた萬公の破目」

萬公「お寅さん、お菊をつれて河の邊に

萬公來ると茲に松彦。

あま相なお里の浮名を永久に

流しける哉河鹿川原に」

五三「油をばこられた上に小言をば

菊子の姫の耳の痛さよ。

偉相に此行先は言はれまい

お里の分つた萬公の身は」

萬公「コラ五三公、おればかりぢやない程に

貴様も尻の臭い奴だよ。

我尻の赤いを知らぬ山猿が

人の事をばかきまはすなり」

五三「耻をかき頭をかきてベソをかき

お寅婆さんにかき毬られにけり。

アハ、、開いた口さへ塞がらぬ

ローマンスの口は口と申せば。

大根畑荒す野鼠土鼠

お里の芋の穴までねらふ」

萬公 「穴尊と穴ない教の穴を見よ」

宣傳使にも妹が居るぞよ」

五三 「芋をほり蕪をぬいてくらふ奴」

三五教の大根役者よ」

萬公 「馬鹿云ふな蕪をぬいた其跡に

てまりの様な穴があるぞよ。

三五の神の教と誰が言うた

貴様の顔にも抜穴がある。

抜けた面口あんぐりとあけ乍ら

三五教とはよくぬかしたり。

五三公のローマンスをば尋ねれば

磯の鮑の片思ひ哉。

萬公は何と云うても色男

お里の方に思はれたぞや。

思はれて思ひ返すは益良男の

權威と知らぬ馬鹿者もあり」

アク 「アク垂れのババに悪垂れ口いはれ

へこ垂れよつた萬公の面」

萬公 「こりやアク奴、何も知らずに喧ましよう

きさまが口をアク所でない。

山猿の様な面した其方に

戀が分つてたまるものかい」

アク「仕殺したお里の事を思ひ出し

ホ、、、とほゝゝをみをする。

幾度もホ、、、と森の中

暗に紛れて死嬢慕ふ。

おかし奴、何程こがれ慕うとも

幽霊抱いては寝られまいぞや」

萬公「こらアクよ、貴様は何を幽霊か

無禮を云ふも程があるぞや」

タク「コレは又面白うなつてお出でたな

お里が墓からお出でくする」

萬公「タクの奴何も知らずに入釜しい

子供に戀が分るものかい」

タク「タクさんは、タクさん姫を持つたぞよ

天下無双のナイスばかりを」

萬公「何ぬかす蜥蜴のやうな面をして

ナイスもクソもあつたものかい」

テク「こりやタクよ慢心奴を捉まへて

相手にするな人が笑ふぞ」

タク 「笑うてもかもうものかい笑はれて

油取られた萬公ぢやもの」

テク 「三五の教の道の萬さんは

婆と娘にくはれける哉」

萬公 「テク迄が何ゴテ〜と囀るか

おれの心を知つて居るかい。

萬公は今こそ負て居るけれど

お菊成人した時を見よ」

五三 「お菊さん大きくなつたら又やろと

萬が一をばあてにしよつて」

萬公 「コリヤ五三公、急いで事はなるものか

先を三年の春を見て居れ」

五三 「又してもそんな野心を起すなよ

今度は首と胴と別れる」

萬公 「三年の先になつたらお寅さん

冥途の旅に行つたあとにて。

何事も萬さんなればお菊ぢやと

今から秋波を送りやがつたぞ」

松彦 「腰折れのみ歌ばかりをうたひ上げ

うたてき事の限りつくせし。

サア萬公、五三公、阿克、タク、テク五人

もうボツ／＼山に登るか」

萬公「宜しかろお寅婆さんはさておいて

お菊の奴が待つてゐるから」

五三「執着の深い奴ちやと思たけし

これ程迄は思はなかつた」

萬公「呆れたかオツたまけたか五三公よ

人は見かけによらぬ者だよ。

さり乍ら俺も誠の道をゆく

萬公なれば戀は廢した。

心配をさうぞなまつて下さるな

メツタにお菊を思はないから」

五三「そうだらう、何程思つてみた所が

向うが厭なら仕方なからう」

阿克「コレは又面白うなつて來たわやい

旅の慰め此上はなし」

テク「テクついて川の畔に來て見れば

婆さんに追はれてバサンとはまる。

阿克運の強いお方が助かつて

世に珍しき話きく哉

萬公「萬さんがあつたらこそあれお前等も

歡喜の笑に漂うたのだ。

心霊の餌さは歡喜と云ふぢやないか

おれを命の親と尊め」

松彦は先に立つて歩み出した。五三公は一足々々坂道を登り乍ら笑ひ半分に歌ひ始めた。

五三「神が表に現はれて

善と惡とを立分ける

ババが川邊に現はれて

萬公とアクを苦しめる

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

此世の鬼に巡り會ひ

心もひそく悄氣返り

只何事も人の世は

直日に見直し宣直し

只何遍も人の前

なぶられもんに會はされて

身の過ちは宣直せ

身の過ちを述べられて

萬公の奴がベソをかく

旭は照る共曇る共

アク公は川へはまる共

月は盈つ共虧くる共

罪のあり丈さらす共

假令大地は沈む共

譬方なき大痴呆

誠の力は世を救ふ

萬公の畜生は夜這する

三五教の宣傳使

ウラルの教の穴捜し

ウブスナ山を後にして

河鹿峠をよぢ登り

ウツカリ川邊に巡り會ひ

嬪の親になぐられる

祠の森に來て見れば

玉國別の宣傳使

野中の森を立出で、

たま〜會つた婆娘

猿に目玉をかき取られ

氣の毒なりける次第なり

皿のよな目玉をむき出され

氣が氣でならぬ次第なり

險しき坂をエチ〜

下りて漸く山口の

險しき流れを打わたり

やう〜茲に息休め

魔性の女に出會はし

荒肝とられし可笑しさよ

萬公が婆に追ひつかれ

欠點さらされし可笑しさよ

あ、惟神 々々

御靈幸ひませよ

あ、叶はんから〜

目玉飛出しましたよ

アハ、ツハアハ、

イヒ、ツヒイヒ、

ウントコドツコイきつい坂

萬公は足がたるからう

おれも一度はお菊さんに

何ぞか都合よく巡り會ひ

マ一度萬公の臆病振り

一伍一什を打明けて

愛想をつかさせやらうかい

それが萬公の一生の

お爲になるに違ない

これ〜もうし松さんへ

私の云ふのが違うたら

ごうぞ叱つて下さんせ

ウントコドツコイ小北山

ウラナイ教の本山に

一寸よう似た名稱だ

此奴ア大方高姫や

黒姫さんの慢心の

其ほこばりが芽をふいて

怪体な教を立て通し

十曜の紋を引つけて

世界をごまかし居るのだろ

何だか知らぬが五三公は

一寸も氣乗がせないぞや

お寅のよな皺苦茶の

婆さんばかりがウヨ／＼と

両手を合せ水鼻汁を

啜りまはして入釜しう

下らぬ事を嘸きつ

曲津を拜んでゐるのだろ

あ、惟神々々

目玉飛出しましたませよ

アハ、ハツハアハ、

最早こゝらでやめておこ

これから萬公の番ぢやぞや

あ、惟神々々

息がつまつて出て来ない」

萬公は負ん氣になつて歌ひ出した。

萬公

「ウントコドツコイ／＼シヨ

五三公の奴めが恪氣して

何ぢやかんぢやと誹りよる

貴様の事ぢやあるまいし

かもうておくれなホツトイテ

法界恪氣も程がある

昔におうた古疵が

一寸物言うたばつかりだ

これも一つの御愛嬌

昔はつまらぬ奴なれき

今は立派な宣傳使

治國別の片腕だ

ゴテ／＼言うて貰うまい

おれにはおれの權利ある

松公さんが偉うても

ウブスナ山の神様に

許して貰うた事もなく

ホンの内證の宣傳使

治國別の留守役だ

本當の事を云ふたなら

萬公さんが宣傳使

臨時代理となる所だ

コラ／＼五三公アク公よ

タク、テク兩人よつく聞け

すべて此世に大業を

なさうと思ふ人物は

大きな影のあるものだ

それをばおかげといふのだぞ

冷血漢の五三公が

さうして英雄豪傑の

心裡が分つてたまらうか

子供は子供のやうにして

沈黙してるが伶俐だぞ

モウ之からは萬公も

遠慮會釋はせぬ程に

正々堂々先に立ち

治國別の代辯を

努めて見やう皆の奴

おれの命令に反くのは

治國別の命令に

つまり反くといふものだ

旭は照る共曇る共

五三公はこける共たる共

月は盈つ共虧くる共

狐は啼く共吼ねる共

假令大地は沈む共

假令五三公は平太る共

誠の力は世を救ふ

曲津の五三公は世を紊す

此世を造りし神直日

此山登る神の御子

心も廣き大直日

乞食上りの皆の奴

只何事も人の世は

高い山路シト／＼

直日に見直せ聞直せ

並んでドシ／＼登りゆけ 身の過ちは宣り直せ

皆過つてふん伸びよ 三五教の宣傳使

アブナイ教のセンチ虫 治國別に從ひて

ハア／＼山路分け登る 悪魔の征途に上りゆく

飽迄つゞくセンチ虫 あははッはアハ、、、

どうやら種が切れて来た 小北の山の真中で

ババを垂れるかこきたない どう／＼俺もへこたれた

ハー／＼フリー／＼フースー／＼

オイ皆の奴、ドッコイ、皆の立派なお方、萬々ここで御休息なさつたら何うですか
歌のまづい松彦さんに、テクの下手なテク公、ゴータクの上手なタク公、悪運の強

いアク公、東海道の五十三次、一つこゝらで、休まう……かい」

松彦

「ハハー、どう／＼弱りよつたなア、川端ではいちめられ、森の中ではおきかさ
れ、又山路で苦められ、よく／＼萬の悪い男だなア。アハ、、、併し何だか松彦
も足が變になつて来た。幸ここにロハ臺が並んでゐる。全体とまれッ」

此聲の終るか終らぬに萬公はドスンと腰をおろした。續いて一同は嬉し相に腰を下
ろした。

(大正一一、一二、九、舊一〇、二二、松村眞澄録)

第二章 小北山（二九〇）

松彦一行は暫く休憩の後、一町計り峻坂を登り、細い階段を二百計り刻み乍ら漸く小北山神館の門口に着いた。そこには白髪の老人が机を前に据え、白衣に白袴で置物の様にキチンと坐つてゐる。奥の方にはザワ／＼と祈念の聲が聞えて居る。

松彦「お爺いさん、私は旅の者ですが、結構な神様がお祀りになつてあると承はり参拜をさして頂きました、この教は何と申しますか」

老爺「お前さんはさこの方が知らぬが、ようマア、御参詣になりました。私は目が見ないので、かうして受けをやつてゐるのだが、それでも有難いもので、人の聲を聞けば、男か女か年寄か若い者か心のよい人が悪い人か、よく分るのだから有難いも

のだ。そしてチョ／＼人に頼まれて、此通り繪を書いてるのだ」

松彦「何と妙ですなア、一寸見せて御覽」

老爺「ハイ／＼見て下さい、これでも信者の人が喜んで額にしたり、掛地にしたりするのだから……」

松彦「なる程目の見ぬ人の書いた繪にしては感心なものだ。ヤア松に龍神さんが巻きついたり、燕に大根、圓山應舉でも跣で逃げ相だ、オイ萬公さん、お前燕に大根は好物だないか、一つ頂いたら何うだ」

万公「松彦さん、あんたも餘程身魂が悪いと見えて、此繪を御覽なさい、お前さんの名の松に一本の角の生れた黒蛇が巻いてるぢやありませんか」

老爺「何處の方が知らんが、これは龍宮の乙姫さんの御神体だ。黒蛇なんて勿体ない

事をいひなさんな」

万公 「それでも大きな口があつて黒い繩が引ついでるぢやないか。それで私は黒い口繩だといつたのだ」

老爺 「アハ、お前さんは繪を見る目が無いから困つたものだ」

万公 「此方に目の無いのは當然だ。目の無い老爺さんの書いたのも、こゝら大方冥土の龍神さんかも知れんぞ」

老爺 「お前さんは此お館へ冷かして来たのだな、そんな人は歸んで下さい」

松彦 「老爺いさん、此奴ア、チノ氣が觸れてますから、何卒見つけてやつて下さい。實の所は此氣違ひを直して頂かうと思つて連れて來ましたのぢや、田圃の中へ這入つて、大根や蕪の生を嚙つたり、薩摩芋を土のついたなり、ほうばるのですから、困

つた癪狂院代物ですわい。何ぞか直して頂く工夫はありますまいかな」

老爺 「成る程そう聞けばチツと此方は氣が觸れてるに見えますわい、さうも私の靈に其様に始めから感じました。氣の毒でムいますなア。此氣違ひは容易に直りますまいから、暫く氣の鎮まる迄、石の牢がしてムいますから、お預かり申して三週間計り暗い所へ突つ込んでおきませう」

万公 「イヤもう老爺いさん結構です。貴方のお顔を拜んでから、次第に氣分がよくなり何うやら正氣になりました。モウ結構でムいます」

老爺 「それでも再發したりするに困るから、二三日入れて見ませうかな。松彦さんじやらお考へは何うですか」

萬公は松彦の袖を頻りに引はつてゐる。

松彦 「ヤア之位なら大した事はありますまい。マア暫く容子を見た上でお願いする事に致しませう」

老爺 「そんなら貴方の御意見に任しませう。何時でも御預かり致しますから」

松彦 「ハイ有難うございます。何卒宜しう頼みます」

五三公は小聲で萬公の袖をチヨイ／＼と引ばり、

五三 「オーイ松に黒蛇、大根に蕪計り書いてるぢやないか、丸で二十世紀の三五教の

五六七殿に居る四方文藏さんの様な爺いさんだね」

万公 「ウフ、オイあこに髭の生れた人が居るぢやないか。あのこそ本當の神さんみた様だなア。あの先生に拜んで貰ふたら、有難いに違ひないぞ」

五三 「ナアにあれば諸の先生だ。大分に酒が好きだと思つて、あの顔の色みい、ホテツ

てるぢやないか」

万公 「コリヤ大きな聲で言ふな。聞ゆるぞ」

松彦 「此教會の縁起が聞たいものですなア」

老爺 「此小北山のお廣間は元はフサの山の北山村にあつたのだ。高姫黒姫といふ立派な宣傳使があり、高姫さんが教祖で、黒姫さんが副教祖であつた。とう／＼あの人も借り事になつたものだ。アブナイ教とかへ首を突込んで了ひ、今はどうならしやつたか、便りもなし、實にアブナイ事をしたものだ。そこで總務をしてムつた蝶蠅別さんが曲彦といふ弟子を連れてこ、へお出になり、小北山の神殿といふて、高姫の遺鉢を受け、こゝで教を開かれたのだ。随分澤山の神様が集まつてゐる地の高天原ぢやぞね。お前さんも神様の因縁があればこそ引寄せられなかつたのだ」

松彦「有難うムいます、其蝶蜷別さんはゐられますかかなア」

老爺「ハイ大奥にゐられますが、餘りいろくの神様が御出入り遊ばすので、お忙しうてお酒の接待計りしてゐられます」

松彦「蝶蜷別様の一つの體にそう大勢お集まりになるのですかかなア。ソリヤ大抵ぢやありませんなア」

老爺「今はかんづまり彦命と仰有いましてな、ウラナイ教の教祖でムいますぞ。それだから随分澤山の神様が御出入り遊ばし、お神酒をあがるので、朝から晩まで本性はチツともムいません、本當に妙ですワ。今仰有つた事と、少し後で仰有つた事は、クレリツと違ふのですから、そこが所謂入百萬の神様のお集まりなさる証據です。何と偉いお方もあつたものですワイ」

松彦「そうするとお憑りになる神様は何と申しますかな」

老爺「餘り澤山で早速には數へる事も出来ませんが、何を言つても、入百萬の神さんですからな。先づ第一神集ひ彦の神、神議姫命様、葦原の瑞穂彦命様、入洲國平姫命様、言依さしまつりの命様、荒ぶる神様、言問し姫命様、神拂彦命様、岩根木根立彦命様、片葉言止め姫命様、天の岩座放ちの命様、天の入重雲姫命様、嚴の千別彦命様、四方の國中彦命様、下つ岩根彦命様、宮柱太しき立ての命様、天の御影彦、日のみかけ姫、益人姫、過ち犯し彦、くさぐさの罪の姫、畔放ち彦、みぞうめ姫、ひ放ちしきまき姫、申さし様……といふ様な立派な神様が澤山に祀つてムいます」

万公「丸で三五教の祝詞そつくりぢやないか。妙な名のついた神さんもあつたものぢや

なア」

爺は眞面目な顔して、

老爺「神様は其お働きに依つてお名が現はれて居るのだから、お名さへ聞けば何を御守護下さるゝいふ事がよく分るやうに、蟻蝶別の教祖がおつけ遊ばしたのだ。元より神様に御名はない、人間が皆お名を差上げて稱へまつるのだからなア」

松彦「成る程、如何にも御尤も。流石は蟻蝶別の教祖様ですなア、お爺さん、一つ神様の因縁を聞かして下さいな、今仰有つた神様はどこに祀られてゐますか」

老爺「其神様は神言殿といふ御殿を立て、祀らねばならんのだが、まだ準備中だ。かうして山のきてつべんまで澤山の宮が建つてゐるが、一番下の大きな御殿が大門神社と云つて、世界根本の生ねきの神様が祀つてあるのだ」

松彦「そして其神様の名は御存じですか」

老爺「アハ、、、肝腎の御仕へしてる神様の名が分らないで何うなりますか、お前さんも餘程分らずやだなア」

松彦「分らないからお尋ねしるのぢやありませんか」

老爺「一番此世の御先祖さんが、國治立命様、それから左のお脇立がゆらり彦命、右のお脇立が、上義姫命様だ。そしてゆらり彦命様の又の御名末代火の王天の大神様と申しますのだ。それから日照す大神さんといふのが祀つてある、其神様の御分靈が羊姫様、羊姫の妹様が常世姫命様だよ。そして稚姫君命様は良の金神様、坤の金神様の御娘子だ」

松彦「一寸待つて下さい。ソリヤ少し配列が違ひはしませんか」

老爺「お黙りなさい。神様の戸籍調べをしてゐるのに、勿体ない何をグズグズ云ひなされる。氣にいらな聞いて下さるな。モウいひませんぞや」

松彦「イヤこれはく不調法申しました。さうぞ御教訓を願ひます」

老爺「そんなら聞かして上げやう。確り聞なされ。此大門神社にはそれ丈の神様と、ただ外に澤山の神様がお祀りしてあるのだ。稚姫君命様が天地から御預かり遊はした八人の結構な神様がある。第一に義理天上日出神様、第二に青森白木上の命様、次に天地尋常様、これ丈が男の神様、次に常世姫様、次が金龍姫様、次が大足姫様、次が琴上姫様、其次が金山姫様此三男五女が變性男子の系統でゐますぞや、それから又常世姫様が天地の神様から始めてお預かりになり育て上げられた神様が入柱これは五男三女だ、第一に地上大臣様、次がたがやし大臣様、次が地上丸様、次が

きつく姫様、次が旭子姫様、次が花依姫様、此神様の靈が猿彦姫と變化、又變化遊ばしてみのり姫とやがてお成り遊ばすそうだ。それから早里姫、地上姫、以上十六柱が魂の根本の元の誠の生粹の大和魂の因縁の神様でゐます。これを合して四々十六の菊の神様と申します。それから又、義理天上さんが預つて育てた神様が七人ゐる。第一に天照彦、天若彦、次が八王大神、大野大臣、それから道城よしのり大廣木正宗、柔道行成、都合二十三柱の神様が天地根本、生粹の靈の元の神様だ。これ位結構な神様の教を聞き乍ら、第一の教祖の高姫さんはアブナイ教へ沈没して了つたのだから惜いものですわい」

万公「もし松彦さん、サツパリ支離滅裂ぢやありませんか。親かと思へば子になつたり子かと思へば親になつたり、何と譯の分らん神さんですな」

老爺「コレ、支離滅裂とは何を云ふのだ。ヤツバリお前は氣違ひだな、黙つて聞かつしやらんかいな」

万公「ハイ」

松彦「此奴あキ印ですから、さうぞ氣にさわすに居つて下さい」

老爺「ヨシ、今言つた二十三柱の神様が天地をお造り遊ばし、人間の姿を現はして現界の政治を遊ばしたが大將軍様、常世姫様の夫婦でいます。それが又、大將軍御夫婦が餘り我が強いので、折角の神政が破れ、御退隱なされ、第二の政治をなされたのが、地上大臣様、耕し大臣様、そこへ地上丸様が御手傳遊ばして、三人世の元結構な世が開きかけてをつたが、又もや慢心が出て現界の政治が潰れ、止むを得ず又大將軍様が變化してサダ彦王となり、常世姫様が變化してサダ子姫となり、きつ

く姫、旭子姫、花依姫といふ三人の子をお生み遊ばしたが、又其政治がつぶれ高天原は大騒動が始まりました、それから今度は四代目の天下の政治を遊ばしたのが、八王大臣様と王龍姫様、王龍姫は後に大鶴姫とおなり遊ばした。又其政治がつぶれ五代目の政治をなさつたのが大野大臣様、大野姫のお二方、此時は非常に盛であつて、世界中が一つに治まり、後にも先にもないやうな世の中の政治が行はれた。そして青森行成さんや、義理天上さん、天地尋常さんがお手傳をなさつたので、非常な勢になつて来た。そして所が餘り世が上りつめて又大野大臣さんの政治がメチヤ／＼に破れ、第六番目には道場美成様と事足姫の御夫婦が御政治を遊ばし、大廣木正宗、柔道行成といふ二人のお子さんが出来、いよく神政成就が成上つたと思へば少しの間に又もや、慢心を遊ばし、八岐大蛇や金毛九尾曲鬼の悪靈に蹂躪され

て、世の中がサーバリわやになつて了ひ、そこへ變性女子の素盞鳴尊が現はれて悪の鏡を出したものだから、今日のやうな強い者勝の世界が出来たのだ。此ウラナイ教は御覽の通り天下太平上下一致だが三五教にバラモン教、ウラル教などは戦計りしてゐるぢやないか、神様が喧嘩なさるごいふ事はある可からざる事だ、お前さんもそんな喧嘩好の神様を信仰せずにウラナイ教の神様を信仰をなされ、昔の昔のさる昔の因縁から、根本の根本から、大先祖の因縁、靈魂の性來、手に取る如くに分りますぞや。あ、惟神 靈幸倍ませ」

万公 「アハ、、、」

松彦 「又氣が違ひ出した、困つた奴だなア、ウツフ、、、」

老爺 「これで此大門神社の神様の因縁はあらまじ分つたでせう」

松彦 「ハイ、よく分かりました。有難うございました。貴方は随分詳しいお爺さんだが、お名は何と申しますかな」

老爺 「私はおちたきつ彦と申します」

松彦 「へー、長いお名ですな」

老爺 「蝶蠟別様に頂いた神名だから、長くても仕方ありません。名が長い者は長生をすることかいひますから、もう少し長くてもいいのですが、まだ修行が足らるので、こちらで止められて居るのでムいませぬ。私の修行が積んだ上は、おちたきつ速川の瀬にます彦命といふ名をやらうと仰有いました」

萬公、五三 「ウツフ、、、エツハ、、、」

老爺 「サア是から、種物神社へ案内致しませう」

松彦「老爺さん、目の悪いのにすみませんア」

老爺「目が悪いと云つても、神様の御用ならば何でも出来るのだ。サアついて来なさい
きつい山だぞね、迂りこけて向脛を打つたり腰をぬかさんやうになさいませや」
と云ひ乍ら、種物神社の前へエチ／＼と登りつめた。

松彦「ここには石造りの宮と木造の拜殿が建つて居りますア。何とマア偉い断岩絶壁
を開いて建てたものですなア」

老爺「ハイ之は大將軍様の生宮と地上丸さんの生宮か鶴嘴の先が榎粉木になる所迄岩を
こついてお造り遊ばしたのだ。何と感心なものでムいませうがなア。此神様に地の
世界の大神様と日の丸姫の大神様が祀つてある。そして右の方に義理天上さんと玉
乘姫様と祀る事になつて居ります。左の方には大將軍様と常世姫様のお宮が建つ

です。これは世界の萬物の種物をお始め遊ばした結構なく根本の神様ですから、
よく拜んでおきなさい。お前さんも若いからさうせ種まきをせんならんのだろ。神
の生宮をポイ／＼と拵へるのが神の役目だから、今こそ男と女が暗がりて、かが安
う生宮を拵へるやうになつたが、昔は人間一人仲々並や大抵で作れたものでありま
せんぞや。其お徳にあやかる爲に種物神社に祭つてあるのだ」

松彦「ハイ有難う」

老爺「サア之から、おちたきつ彦がモ一つの上的お宮様を御案内致しませう」

萬公「モシ／＼老爺イさん、そんなきつい岩石を目の悪いのに登つて、何卒谷底へ落ち
たきつ彦にならん様に願ひますで。サア五三公、アク、タク、テク、お爺さんのお
伴だ。何とマアきつい坂だなア」

老爺「あ、あ、人に改心さそうと思へば仲々の苦勞だ。ソレ御覽なさい、ここに木造りの宮が三社建つてをるだろ。中央が生場神社の大神様、岩照姫の大神様、此御夫婦が祀つてある。右のお社はりんごう美天大臣様、木曾義姫の大神様の御夫婦が祀つてあるのだ。そして左の方の宮には五六七上十の大神様、旭の豊榮昇りの大神様御夫婦が祀つてあるのだ。モ一つ上に三社あるけれど、これから上は道がないから、こゝからお話しておかう。石の宮が三社あつて、正中が月の大神様日の大神様御夫婦が祀つてある。右の石の宮は末代日の王天の大神様上義姫大神様御夫婦が御祀りになつてゐる。左の方が日照らす大神様、大照皇大神宮様御夫婦が御祀りだ。何ぞ結構な地の高天原が開けたものでせうがな」

松彦「モウ此外に神様の祀つてある所はありませんかナ」

老爺「まだない事はないが、そう一遍にお話すると、話の種が切れるから、又今度にのけておきませうかい。お前さんも一遍に食滞しては困るからなア」

萬公「アツハ、お爺いさん、御苦勞でした。實の所は三五教の宣傳使、治國別命の片腕の萬公さんだ。氣違でも何でもないのでから、そう思つて下さい。随分怪体な神さんばかり、能う拜まして下さつた。これも話の種になりますわい。「靈界物語」にのせたら、キツと大喝采を得ませう。お前さんの方では種物神社だが、此萬さんは種取り神社だ。義理かき天上の神様となつて、これからウライナイ教を一生懸命に信神しませんワ。オツホ、」

老爺「この年寄を此處迄連れて来て、何と云ふ愛想つかしを云ふのだ。それだから三五教は悪の教といふのだ。大方お前も變性女子の廻し者だろ、油斷のならぬ代物だな

ア

松彦 「此奴ア、お爺いさん氣が違うてるのですから、さうぞ氣に觸へて下さいませすな」

老爺 「あ、さうだく、氣の觸れた方だつたなア。何ほ氣違でも餘りな事云ふと氣の宜うないものだ。併し氣違ひとあれば咎める譯にもゆかん、見直し聞直しておかう」

松彦 「ハイ有難うムいました。お年寄に高い所迄御苦勞になりましたして申譯がムいません」

老爺 「お前さん達、下の大廣間で今晚はお泊りなされ、女ばかり百人あまりも鮎詰になつて寢て居ります」

五三 「オイ、アク、タク、テク、泊めて貰はうかなア」

阿克 「なんだ、女ばかり鮎詰になつてるさ、爺さんが言つたら、顔の紐迄解きやがつてアタ見つともない、女の側は險呑だ。サア松彦さん、遅れちやなりません、折角の

お爺さんの御親切だが、今日はマア御免被つて、又改めてお世話になりませうか」

松彦 「あ、それがよからう、お爺いさん、さうぞ蝶蝶別さんに宜しう言つて下さい。今日は急ぎますから、これで御免を蒙ります」

老爺 「萬さんごやらを氣をつけて上げて下さいや、危ない一本橋がありますから、川の中へでも、氣の觸れた人は飛込むかも知れませんからな」

松彦 「ハイ御親切に有難うムいます。サア一同の者、お暇乞ひして急がう。發車時間に遅れちや今夜中に萬壽山へ歸れんからなア。お爺さん左様なら」

萬公 「おちたきつ速川の瀬にます彦の神さん、有難うムいました」

老爺 「オホ、、、」

(大一一一、一二、九、舊一〇、二一、松村眞澄録)

瑞 月

この度の世の立替は萬世に

只一度の經綸なりけり

八百萬神は在れども世を照らす

神は月日が良め刺すなり

|| 舍身活躍(末の卷)終 ||

舍身活躍末の卷奥附

定價 金壹圓五拾錢

京都府何鹿郡綾部町字上池田二七番地

編輯發行 櫻井重雄

京都府何鹿郡綾部町字木宮東四ツ辻十三番地

發行所 天聲社

【振替大阪六〇五三四】

不許
復製

大正十三年八月十二日印刷
大正十三年八月二十日發行

△ 豫

告 △

舍身活躍(申の巻)九月五日 發穴の豫定

目次

序文
總說

第一篇 小北の特使

第一章	松風
第二章	神木
第三章	大根蕪
第四章	靈の淫念

第二篇 惠の松露

天 燈 捕

第五章	肱鐵
第六章	啞忍
第七章	相生の松
第八章	小蝶
第九章	賞詞

第三篇 裏名異審判

第一〇章	棚卸志
第十一章	仲裁
第十二章	喜苔歌
第十三章	五三の月

第四篇 虎風獸雨

第四章 三昧經……………

第五章 曲角狸止……………

第六章 雨露月……………

第七章 万公月……………

第八章 王則姫……………

第九章 吹雪……………

第二十章 蛙行列……………

以上

第一申込所

丹波綾部町

天聲社

王仁文庫 (全十篇)

出口瑞月氏が神授の大經綸と天來の大抱負と、縦横の大神機と時に應じ機に臨みて、隨所に閃發せし文章詩歌其他二十有餘年間積んで山をなす。乃ちその中より、精粹を抜き、珠玉を選び、序を正し類を纂め、王仁文庫と題して茲に刊行の機運に向へるは誠に時代の急迫の然らしむる所にして、實に百萬讀者の渴望を醫する神液甘露たりと謂ふべし。

王仁文庫

第一篇

皇道我觀

定價 金五拾錢

郵稅 金貳錢

「皇道我觀」は皇道の真髓を縦説横論し、世道・人心の歸趨を指示せる大文字にして皇國の臣民たる者の必讀の名著たり。

王仁文庫

第二篇

國教論集

定價 金五拾錢

郵税 金貳錢

本篇には「國教樹立論」「信仰の墮落」「皇國傳來の神法」「太古の神の因縁」の四篇を収む。皇道の真髓は一貫して漲り溢れ、國教は腐敗し信仰の墮落して其極に達したる混沌の現今を救ふは本篇に依らざるべからず、太古の神々の因縁は必ず見落す勿れ。

王仁文庫

第三篇

瑞能神歌

定價 金五拾錢

郵税 金貳錢

瑞の神歌は裏の神諭にして仁愛大神の人類に與へられたる神示なり、方舟なり、救世の綱なり、すみやかに起りつゝ、あり亦速やかに起るべき大地獄道の火焰をまぬがれんとせば、本篇を見よ。叩かざれども開かれし救の門、求めざれ共仁慈の神は之れを與へられぬ。迷ふ勿れ!! 來れ!

王仁文庫

第四篇

記紀真解

定價 金五拾錢

郵税 金貳錢

世に國學者を以て任ずる者徒に多しと雖も、眞の古事記を解する者一人として無し、日本書記を解する者亦あるなし、之れ其内義を理解する能力なき爲めなり、本篇は「古事記」の一節及び「日本書記」の一節を解釋し密義を發現されしものにして現代と併せ解釋され必ず何人も肯定する様平易に解かれしもの也

王仁文庫

第五篇

道の大原

定價 金五拾錢

郵税 金貳錢

三丹の巒峰を一瞬に收め、保津の清流を双脚に踏みて、高倉山の山徑に宇宙の秘密と人生の幽旨とを問答せる顯幽の二大神人あり。一を本田親徳大人の幽姿となし、一を出口瑞月氏の顯體とす。而して其神言秘語を集拾類纂せられしものは本書也。

王仁文庫

第六篇

多満の礎

定價 金五拾錢

郵税 金貳錢

本書は教祖の表の神諭に對する出口瑞月氏の裏の神諭の一部分也。迷へる者、悩める者は本書によりて靈魂の繩を求めよ。

王仁文庫

第七篇

記紀眞釋

定價 金五拾錢

郵税 金貳錢

本書は古事記日本記の神代の卷を眞釋して現代の危機を救済指導せんとするの大文字也。本邦千古の神文古典に含蓄せる豫言的價値を知らんと欲する者は、先づ一讀することを怠るべからず。

王仁文庫

第八篇

八面鉞

定價 金五拾錢

郵税 金貳錢

本書には「公認教と非公認教」以下都合八篇を收輯す。何れも出口瑞月氏が皇道と宗教の本義に就き縦説横論し、當局並びに世人の無智と偏見とを指摘し批判を加へて遺憾なからしめたり。